

沈志遠著

## 「政治経済学大綱」緒論

はしがき

上海で沈志遠氏とお話しする機会をもつたのは一九五五年十月十四日であつた。それはわれわれが国慶節に招待され、その帰途上海を見学し、市長招宴の席上でのことであつた。その翌晩沈氏はホテルに來訪され、津久井龍雄氏と三人で数時間話合つた。氏が現在中国有数の経済理論家であることは今さら説明する必要もないが、さらに上海政治協商會議副主席として活躍されている。その折、私は沈氏の「政治経済学大綱」を翻訳しませうと約束して歸つたのであるが、残

念ながら、未だにそれを果していない。その書物は既刊の上巻だけで四三一頁に上る大部なものである。今ここにその緒論だけを訳載し、沈氏へお詫びのしるしとするとともに、一日も早く訳業を完了し、約束を果したいものと思う。

### 一 政治経済学を学習することの

#### 重要意義

今日、社会主義は全世界において勝利をおさめ、すでに世界各国における無産階級の行動任務となつてい

る。各国の無産階級およびそれが指導する広汎な人民大衆は、この偉大な歴史的任務を完成するための十分な確信をもつようになっていた。必ずや彼等は腐敗し切つた資本主義制度を打ち倒し輝かしい社会主義を世界中に勝利させることであろう。無産階級がこのような必勝の信念をもつに至つた、その根本的原因是マルクス・レーニン主義による思想的武装であり、特にマルクス・レーニン主義政治経済学による思想的武装である。

### 社会経済の発展を研究することの重要性

マルクス・レーニン主義の理論は社会の歴史的発展法則を示し、資本主義は必然的に崩壊し、社会主義が必然的に勝利するという科学的結論を出した。社会の歴史的発展の基礎、すなわち資本主義が必然的に崩壊し、社会主義が必然的に勝利するという根拠は、必ず社会経済の発展法則のうちに求められるべきであり、

社会の物質的生産の条件のうちに求められるべきである、何となれば社会の歴史的発展の法則は、まず社会の物質的生産の発展法則であり、生産力と生産関係の発展法則であり、社会経済の発展法則であるからである。

かくしてスターリンはいう、「以上のようにして、歴史科学の主要な任務は、生産の法則、生産力と生産関係の発展法則、社会経済の発展法則を研究し明らかにすることである。」

「以上のようにして、無産階級の党が真の党になるためには、まず生産発展の法則、社会経済発展の法則に精通しなければならない。」

「以上のようにして、政治上において錯誤を犯さないためには、無産階級の党はその綱領を制定し実践活動を始めるに当つて、まず生産発展の法則、社会経済発展の法則から出発しなければならない」と、レーニン主義の諸問題「モスクワ中国語訳、七二四―二五頁」。

どうして社会の歴史的発展の鍵が、根源的には、社会経済の発展法則の中から、また社会の物質生産の条件の中から求められねばならないのか。それは人間の経済生活、人類社会の存在に必要な物質資料の生産が社会生活全体の基礎であるからである。経済生活がなく、また物質資料の生産がなければ、その他の一切の社会生活はあり得ない。

### マルクス主義経済学説の発展とその革命に対する実践的指導性

マルクス・レーニン主義政治経済学の基本的任務は、社会経済構成の運動法則を示し、物質的生産の発展法則や社会経済の発展法則を示し、それによつて資本主義の死滅および社会主義の勝利と生成の歴史的必然性を明らかにし、さらにまた全世界の無産階級に革命闘争の思想的武器と革命の勝利する確信を与えることである。だからこそ、かつてレーニンはマルクス主義

「政治経済学大綱」緒論（武藤）

の主要内容がマルクスの経済学説であることを指摘し（マルクス・エンゲルス・マルクス主義」モスクワ中国語訳一九頁）、次の如く述べている。すなわち「マルクスの経済学説は、マルクスの理論の最も深い・最も緻密な・最も詳細な実証と運用である。」と（二七頁）。マルクス主義の一つの偉大な傑出した代表的著作「資本論」は、十九世紀の經典であるマルクス主義の一切の基本的内容を集中的に示しているが、それは主として政治経済学の著作である。「資本論」第一巻の初版序言の中で指摘している、「本書の窮局の目的は現代社会の経済的運動法則を暴露することにある。」と（一九四九年ロシア語版、八頁）。ここにいわゆる現代社会とは、資本主義社会を指すのである。マルクス主義経済学説は資本主義の経済的発展法則を暴露するとともにその社会の内部における階級闘争の現実的基礎を説明し、その社会の発展方向（すなわち必然的崩壊の方向）をも示し、さらに無産階級に対して社会主義への革命路

線を示している。

かくして「ソ同盟共産党小史」は次の如く述べている、「マルクスとエンゲルスは資本主義の発展法則を発見し、さらに資本主義社会の発展およびその社会における階級闘争は必然的に資本主義社会の崩壊をもたらし、やがて無産階級の勝利と無産階級の専政をもたらすことを科学的に証明している。」と（モスクワ中国語訳、二二頁）。

帝国主義と無産階級の革命時代ならびにソ同盟における社会主義と共産主義の建設時代となり、レーニンとスターリンが相次いでマルクス主義を受け継ぎ、特にマルクス主義の経済学説を受け継ぎ、より高い段階に発展させた。レーニンはその著「帝国主義は資本主義の最高の段階である」において、帝国主義の経済的本質に対して、輝かしい科学的分析を行い、大いにマルクス主義経済理論を發展させ豊富にした。レーニンは彼が発見した帝国主義時代における資本主義發展不

均等の法則に基き、社会主義がすべての資本主義国家において同時に勝利することは不可能であり、まず一国家内において単独に勝利し得るといふ科学的結論を得た。その後、ソヴェト政権初期の一小冊子において、レーニンはさらに資本主義から社会主義にいたる過渡期経済の特質と発展法則とを独創的に闡明し、彼はこの過渡期における経済の特質と発展法則に基き、新経済政策を制定し、社会主義に向つて社会主義を建設する具体的経路を示した。

スターリンは綿密に現代資本主義と資本主義の全般の危機を研究し、第一次世界大戦以後における資本主義経済の發展をマルクス・レーニン主義に基いて科学的に分析し、レーニンの帝国主義論を一步前進させた。同時にまた、スターリンはレーニンの指示した社会主義建設の原則と基本方針に基き、ソ同盟における社会主義建設の豊富な經驗を理論的に総括し、徹底的に社会主義社会における経済發展法則および共産主義

社会への過渡期の問題を研究した。このようにして、スターリンは独創的に共産主義建設の理論を發展させたのであるが、その共産主義建設の理論的發展はマルクス・レーニンの経済学説の發展がさらに高く新しい段階に到達したことを示している。偉大なソ同盟は、すでにスターリンおよびその経済理論の直接指導の下に、社会主義建設という偉大な勝利を実現し、さらに共産主義への移行に成功しつつある。

かくして、世界の無産階級が社会主義を勝ちとる闘争は、マルクス・レーニン主義政治経済学の理論的指導と絶対的に不可分である。

それだけではなく、中国（および一切の植民地および半植民地国家）の人民が新民主主義革命を勝ちとつた闘争、および現在の新民主主義から漸次社会主義へ移行する闘争もまた、同様にマルクス・レーニン主義政治経済学の理論的指導と不可分である。

毛沢東主席はマルクス・レーニン主義経済理論を中

「政治経済学大綱」緒論（武藤）

国における社会経済の具体的現実結びつつマルクス・レーニン主義経済学の基本的観点と方法とを中国における社会経済の具体的現実に応用し、中国の経済問題を解決するため、各種の経済政策を定め、このようにして毛主席の経済思想は形成されたのである。

さらに重要なことは、毛主席が中国革命を指導したすべての理論は新民主主義革命理論に包括され、さらに社会主義工業化の理論および農業・手工業・資本主義商工業を社会主義に改造する理論は、すべてマルクス・レーニン主義経済学の理論に基いているばかりでなく、その理論と不可分であるということである。毛主席の中国社会各階級についての分析、旧中国の社会経済的構成についての分析、および中国革命の任務・性質・力・發展の前途などの問題についての非常に深い科学的研究は、すべてマルクス・レーニン主義政治経済学と史的唯物論の豊富な学識が基礎となつていたのである。

このように見て来ると、政治経済学は一つの革命の思想的武器であり、さらに中国（および一切の植民地および半植民地国家）人民の反帝・反封建・反官僚資本という新民主主義革命を闘いとり、新民主主義から漸次社会主義へ移行する一系列の闘争の理論的根拠でもある。

### 基礎が上層建築の決定に影響することと政治

#### 経済学学習の重要性

史的唯物論の重要な一つの原則はわれわれに教えている、すなわち社会の基礎がその上層建築を決定すること。スターリンは「マルクス主義の言語学における問題を論ず」という一書においてわれわれに教えている、——社会の「基礎は社会の発展の一定段階における社会経済制度である。上層建築とは社会の政治・法律・宗教・芸術哲学に対する観念およびその観念に適合した政治・法律などの制度である」と。

「それぞれの経済的基礎は、常にその上層建築と適合している。封建制度の基礎の上にそれ自身の上層建築・それ自身の政治法律などの観念、およびそれらの観念に適合した制度がある。資本主義の基礎の上にはそれ自身の上層建築があり、社会主義の基礎の上にもまたそれ自身の上層建築がある。基礎に変化が生じ消滅させられる時には、その結果として上層建築もまたそれに従つて変化し、消滅させられる。新しい基礎が生成する時には、その新しい基礎に適合した新しい上層建築がまたそれに従つて生成する。」と（「マルクス主義と言語学の問題」人民出版社、一一二頁参照）。

このようにして、どのような経済的基礎があれば、その基礎に適應してどのような政治・法律などの制度および文芸・哲学・道德などの思想意識があるかを知ることができるのである。マルクス主義者がほんとうに確実に社会の政治現象と一定の意識形態の本質を認識しようとするならば、必ずそれらを生み出す経済制

度・経済関係の分析から着手しなければならない。

現在世界における両陣営——アメリカは反民主侵略陣営の中心であり、ソ同盟は平和民主陣営の社会・政治・思想の中心であるという情況であり、あたかも尖锐な対照をなしているかの如くである。社会的には、アメリカ帝国主義者のデマの「アメリカ生活様式」の内容は、簡単にいえば次の如くである。すなわち一面では売淫無恥、他面では艱苦奮闘の生活である。また一面では豪華無比であり、他面では飢寒窮迫の生活である。また一面では營利狂・色情狂・欺詐・盜竊・暗殺・民族仇視等々の生活であり、他面では失業・破産・乞食・歸る家なく・魂を売り・差別視され・迫害される等々の生活である。政治的には、現在の資本主義各国における旧民主主義の外衣はすでに痕跡を残すのみであり、ファシストの兇惡面が却つてハッキリと露呈されて来た。欧米各国における資本家階級の政府は、対内的には人民を鎮圧する暴力統治を實行しつつ

あり、平和・民主・国家の独立主権を闘い取る一切の愛國的人民に対して敵視的態度をとり、対外的には擴張・侵略・基地網・原子威嚇・細菌戦・化学戦・「北大西洋条約」・「欧洲軍」等々に夢中となつている。思想イデオロギーの面における最も顯著な特徴は、戦争を欧歌し・種族の仇恨を提唱し・色情猥慾を鼓吹し・神秘主義を宣揚し・「アメリカ時代」を宣揚し・科学の進歩を詛呪するなどである。このような一切の社会・政治・意識の面における現象の根源はただ一つであり、それは資本主義の全般的危機が日に益々拡大深化し、帝国主義各国に内在する基本的矛盾——このよ  
うな経済制度内部の基本的矛盾、すなわち資本主義の生産力と生産関係の調和すべからざる矛盾が、すでに尖鋭な段階にまで發展し、「收奪者が收奪される」と  
とが、すでに全世界の無産階級によつて行動日程に上つて来たということである。腐朽・寄生・垂死の資本主義制度を研究しないで、アメリカ帝国主義戦争挑発

者たちの一切の氣狂じみた行為を正確に理解することはできない。

これに反して、別の一つの世界、すなわちソ同盟および人民民主主義国家の陣営においては、全く別の状況にある。ここにおいては、社会生活の面でわれわれの見るものは、全面的な生産熱・愛国熱・人民の幸福の増進であり、人民の文化は不断に高まり、人と人との間はただ互助と友愛であり、民族と民族との間はただ平等と友好と合作である。人民は真の自由を享有し、高尚な品德をもっている。政治の面においては、真に人民全体の民主主義を實行し、対外的には一貫して平和政策を堅持し、帝国主義的侵略政策には絶對に反対である。思想イデオロギーの面では、科学の發展に全力を注ぎ、大いに發明と創造を奨励し、革命的な人道主義を鼓吹し、新愛国主義精神を發揚し、世界平和を歐歌し、侵略戦争に絶對反対し、弁証法的唯物論を宣揚し、神秘主義に反対するなどである。ところ

でこれら一切の事情の根源は、社会主義あるいは人民民主主義国家の經濟制度のうちにある。これらの經濟制度の優越性は次の点にある。すなわちそれらは社会主義的、あるいは社会主義成分が指導的であること、それらは人が人を搾取することがないか、あるいは漸次搾取制度が消滅しつつあること、それらは労働者階級が指導的であり、全労働人民の幸福な生活を増進し保障することが唯一の目的であること、ここには經濟危機がなく、あるものは急速な生産の直線の上昇であること、ここには生産力の破壊に應じて技術の發展に週期的な間歇状態がなく、あるものは生産が高度な技術的基礎の上に不断に完備しつつあるということである。

かくして、戦争・侵略・種族仇視・道德墮落・失業・貧困・欺詐・盜竊・色情・淫乱……これらの一切はすべて資本主義の搾取制度と不可分のものであり、前者は後者の必然的産物である。

かくして、その他各種の社会現象・政治と意識の形態および当面の国際関係などを正確に厳密に理解するためには、われわれはほんとうに政治経済学を学習しなければならないことを知るのである。

われわれが政治経済学を学習する重要な意義は以上の如くである。

## 二 生産、生産力と生産関係

### 物質資料の生産——一般社会生活の基礎

史的唯物論はわれわれに教えている、人類社会の必要とする物質資料の生産が、一般社会生活の基礎である。マルクスはいう、「人間の意識が彼らの存在を規定するのではなく、むしろ逆に、人間の社会的存在が彼らの意識を規定するのである。」と「政治経済学批判」序言)。スターリンはいう、「社会的存在がどうであり、社会的物質的生活の条件がどうか、社会の思想・理論・政治観念および政治制度がどうか

るかを理解させる。」と「レーニン主義の諸問題」モスクワ中国語訳、七一七頁)。

かくして、いわゆる社会的存在とは、その社会の物質的生活条件のことである。しかし物質的生活条件は自然界からそのあるがままのものとして受取るものは非常に少なく、大部分の生活資料は人類の労働による生産過程を経て獲得するものである。かくして社会的存在として物質生活をなす主要なものは、物質的生活資料の生産であり、これが社会生活全体の基礎である。物質の生産は、如何なる人類社会においても常に生存の主要な基本的条件である。

物質資料の生産過程は実際上人類が自然の事物を改造して自己の必要を満すところの労働過程である。たとえば、人が田を耕し・棉を植え・糸を紡ぎ・布を織り・衣を縫い・それを自分が着て寒さを防ぐ必要を満すこととくであり、これらの自然の事物を改造する一連の労働過程が、生産あるいは生産過程なのである。

ここにおいて、生産するためには、必ず三要素が具備しなければならぬことを明らかにするのは困難でない。そのうちでどの一つが缺けても、生産は成立しない。これらの三要素とは、(一)人類の目的をもつた活動——労働、(二)労働対象、(三)労働用具である。上例によれば、田を耕し、棉を植え、糸を紡ぐ……これら「耕す」、「植える」、「紡ぐ」などの動作は、すべて人間の労働である。これなしには、絶対に生産は語れない。人間の労働——耕す・植える・紡ぐ・織るなど——を経なければ、土地は原始的な荒地であり、棉は絶対に生長せず、紡糸・織布はなおさら語れない。その次は労働対象である。われわれが耕作するために、必ず耕作の対象——土地と種子——がなければならず、紡織するためには、必ず紡織の対象——棉花と棉糸——がなければならない。その他、魚を捕えるためには、魚を捕える対象——河海湖沼が必要であり、石炭を掘るためには、採炭の対象——鉱山——が必要

であり、その他もまた同様である。労働対象がなければ、労働は無駄となる。労働対象は生産過程には絶対に必要な条件の一つである。最後に、如何なる生産的労働も必ず用具の助けをかりて行われるものである。すなわち耕作は鋤鉞あるいはトラクターの助けをかり、紡織は紡車と織布機の助けをかり、魚獲は網を用い、採炭は掘鑿機を用いねばならず、その他如何なる生産も労働用具の助けをかりないで行われるものではない。

それ以上はわれわれがさらに分割して検討するところにゆずろう。

### 生産力およびその要素の一——労働力

以上において述べた如く、生産の主要な前提は労働である。労働する時、人間は一定量の体力と脳力（すなわち筋肉細胞の消耗と脳細胞の消耗）および智力を消費する。このような人間が生産労働に従事する中で

消耗するところの体力と智力の総和こそが人間の労働力 (labour power) である。

人類天賦の体力、すなわちその天性の器官である手・脚・脳などは、幾千年来ほとんど変動していないが、人類が生産に従事する労働力は、幾千年来の歴史的過程において大いに變動している。原始社会における野蠻人の天賦の体力は、現代の機械で生産する労働者の体力に比して多少強いかも知れないが、現代の機械で生産する労働者の労働力が原始野蠻人の労働力に比して非常に強いことは明らかである。原始野蠻人が一日の間懸命に獵し得た食物は、往々にして一人の飽食を充すに足りない。現代の機械製粉工場における労働者の一日の労働の結果は、数百数千人の食用に供し得てさらに余りがあるであろう。これは労働生産率 (Productivity of labour) が大いに高められた結果である。労働力は単に体力と脳力の消費だけではなく、その裏面に主要なものとして労働者の一定の生産的経

験と労働技能 (生産用具を使用する本旨) が含まれており、このような生産経験と労働技能は労働要具 (instruments of labour or of production) あるいは生産用具の進歩につれて進歩するものである。最近における生産用具の急速な進歩により、労働者の生産経験と労働技能の改善と進歩もまた急速となり、数十年前 (甚だしきに至つては数年前) における生産技能は、今日では全く陳腐となつて用に適しなくなつている。かくして、生産用具の日新月歩という不断の改善により、人間の労働力自身もまた不断の改善向上が不可能ではない (事実上もまた不断に改善向上しつゝある。) たとえば労働力すなわち労働者の生産経験および労働技能が、生産要具の改善に應じて改善と向上が出来ないとするれば、ただ新式機械設備のみがあつてもこのような新式設備を使用する人がないのであるから、生産もまた阻害され進展し得るものではない。かくして、不断に技術幹部を養成し、不断に労働者

階級の労働熟練度と技術水準とを高めることが、社会主義経済の建設に対して重大な意義をもっていることを知るのである。ソ同盟が極めて短い歴史的期間（三つの五カ年計画にも足りない期間）に、生産技術の裝備において、工業発展の速度と均衡において、各資本主義国家を超越し得た基本的原因は、ソ同盟の労働者階級・集体化農民および労働知識分子が社会主義社会における生産技術の加速度的な改善を懸命に行い、不断に労働技能と豊富な生産経験とを高めたこと、換言すれば、彼等が不断にその労働力を高め改善したことにある。スタハノフ運動の全国的風靡は、ソ同盟の労働者階級が競争的にその労働力を高める自覚運動であった。このようにソ同盟の労働人民は社会主義社会における生産技術条件を不断に改善し高める唯一の偉大な原動力であった。

かくして労働力は絶対に、単なる体力と脳力の生理的消耗ではなく、また単なる生理的範疇でもなく、そ

れは一つの社会経済的範疇であることがわかる。それは古来から不変のものではなく、それは社会的生産力（productive forces）であり、不断に発展する最も基本的な一要素である。労働力については、労働者——人——自身が、一定の生産経験と技能をもとにして生産用具を使用しつつ物質資料の生産を行うのみならず、さらに彼等はその生産的経験と労働技能の助けをかりて生産用具を創造し改善することについてもいわねばならない。かくして労働力は、すなわち労働者——人——自身は、社会的生産力の最も重要な要素である。

### 人間労働の特点

結局、人間労働は単に人間天賦の器官によつて行われるだけのものではなく、主として労働用具あるいは生産用具の助けをかりて行われるものである。人間は一定の生産用具を創造し使用し、一定の物質的資料の生産に従事し、自己の一定の生活需要を満して来たの

であるが、これこそ人間の生産活動の目的性と自覚性の顕著な表現である。一般の動物たとえば蜘蛛・蜜蜂・燕・蟻などもまた、表面上は人間の生産活動とよく似た活動を行う（たとえば蜘蛛が巣を、蜜蜂が蜜をつくる活動など）が、しかしこのような動物が行う活動は本能的活動であり、単に天賦の器官によつて行われるものに過ぎず、さらにこれらの活動自体が彼等に天賦の生理作用の現われに過ぎないのである。人間の労働は動物の「労働」と本質的に異つた特質をもつ、すなわちそれは人間労働が目的性と自覚性をもつことであり、この目的性と自覚性のある決定的な指標は、労働用具を使用して生産を行うという一事実である。

マルクスはかつていつた、「蜘蛛は織物師の作業に似た作業をおこない、また蜜蜂はその蠟製の窩の建築によつて幾多の人間建築師を赤面させる。だが、最も拙劣な建築師でも最も優秀な蜜蜂よりもそもそもから優越している所以は、建築師は窩を蠟で建築する前に

すでにそれを自分の頭の中で建築しているということである。労働過程の終りには、その初めに当りすでに労働者の表象のうちに・つまりすでに観念的に・現存していた一の成果が出てくる。労働者と蜜蜂の区別は、ただ彼が自然物を改変する形式にあるだけではなく、同時に自然物の中に自己の自覚的目的を実現するところにある……」（抄訳「資本論」第一巻、一九四九年ロシア語版、一八五頁—長谷部訳、一、三三〇頁）。

かくして、人間の生産的活動の特点是、それが自覚性を持ち、生産用具の創造と使用がその必要条件であるということである。

### 生産力の要素の二——生産用具

真の意味での生産は、人間が生産用具を製造し始めた時から始まつたのである。生産用具——その最も原始的で、最も粗策な用具たとえば石斧あるいは木の棒のごとき——を製造する以前においては、類人猿はま

だ最終的に動物界から離脱して人間に変化していき、したがって根本的にいつて生産とはなつていない。類人猿が動物界を離脱して人間に変化するのには、ただ労働用具を製造ならびに使用することを完成した時においてである。「労働用具の創造と使用、……（これが）人間の労働過程に特有な特徴である。」〔資本論〕一八七頁。

労働用具あるいは生産用具は、労働者がそれを自分と労働対象との間におき、それによつて労働対象を改造し、自然物としての物を改造するもの（手段）である。それは労働者と労働対象あるいは自然界との間に生ずる関係の連繫物である。

社会的生産の発展、または生産力水準の向上は、何よりもまず生産用具の進歩によるのである。すでに述べた如く、労働力——用具を使用する人自身の能力もまた、生産用具の改善につれて進歩するものである。かくして歴史上における一定の生産用具は、人間の労働

働力の尺度であると同時に、また社会的生産力の発展水準の尺度または指標となるのである。人間の数千年来の歴史において、生産用具の進歩と社会的生産力の発展は、もはやその距離を計ることの出来ないほど大きい。生産用具の新しい進歩のあるたび毎に、社会的生産力が一步一步発展したことは極めて明らかである。次の文章はスターリンが生産用具の進歩によつて社会的生産力の発展が引起された大体の状況を述べたものである。

「粗策な石器から弓矢への移行は、それに応じて狩猟生活から動物を馴養する原始的牧畜に移した。石器から金属用具（鉄斧・鉄鋤など）への移行は、それに応じて植物を耕作する農業に移した。金属の製造用具が相次いで改良され、冶金ふいごへの移行および陶器生産への移行は、それに応じて手工業の発展となり、手工業の農業からの分離となり、独立した手工業生産がその後手工業的工場生産へと発展するのであ

る。手工業的生産用具から機械への移行によつて、手工業的工場生産は機械工業に転化し、さらに進んで機械となり、このようにして現代機械化工業の出現となつたのである、——これが人類史上における社会的生産力發展の大体の姿である。」〔「レーニン主義の諸問題」モスクワ中国語訳、七二六頁〕。

以上の如く、生産用具の進歩は社会的生産力發展の信頼すべき指標であると同時に、また社会的生産關係の転化の指標でもある。かくしてマルクスはいう、「労働用具の遺骸はすでに絶滅した社会経済形態の形態にとつて、あたかも遺骨の構造がすでに絶滅した動物の組織の研究に対すると同様に、極めて重要な価値がある。それぞれの経済時代の区別は何が生産されたかにあるのではなくして、どのようにして生産されたか、どのような労働用具を用いて生産されたかにある。」と〔「資本論」摘訳、ロシア版、第一巻、一八七頁〕。

ここで指摘しなければならない重要なことは、生産

力の一要素である生産用具が、それ自体としては何ら社会経済的範疇ではなく、ただ一つの技術的条件に過ぎないということであり、スターリンの指摘している如くである、すなわち「この点において、言語は……生産用具に区別するところがない。たとえば機械は、資本主義制度に奉仕するかわりに、社会主義制度に奉仕することも出来る」と〔「マルクス主義と言語学の問題」五一六頁〕。かくして生産用具は一切の社会および一切の階級に対して一視同仁である。生産用具自体はどのような階級的性格もない。しかし同じ機械、または同じ生産設備が、異つた階級に掌握され、異つた社会制度で使用されると、非常に異つた生産的効果をもたらすことができる。生産用具が歴史上において進歩的階級に掌握される時には、社会的生産力の迅速な發展という作用を發揮することができる。十八・十九世紀における資本家階級と今日の労働者階級とはその顕著な例である。同一の生産用具が現在腐朽の極に達してい

る資本主義社会において使用される時は、その効果が社会主義あるいは人民民主主義制度の社会において使用されるのに及ばないこと遙かに遠いことは極めてハッキリしていることである。効果が異なるばかりでなく、使用の方向をも非常に異つたものとする事ができる。最も顯著な例は、アメリカ帝国主義が全力を尽して原子力と化学製品とを応用しようとしているのは、大量殺人の目的にしようとする事であり、ソ同盟の科学者が熱心に原子力の利用を研究しているのは、自然を改造して人類を幸福にし、化学薬品を利用して大規模に農地の害虫を除去することにある。しかし、これらはすべて階級と社会制度が作り上げるもので、生産用具自身にはどのような階級性も、またどのような「偏向」性もないのである。

人間が物質資料を生産する各種の生産用具と、一定の生産的経験および労働技能をもち生産用具を使用し、物質資料の生産を進める人（労働者）、これらの要

素が結合して社会の生産力を形成する。簡単にいえば、生産力の要素は生産用具と労働力とである。

### 機械論者の錯誤

政治経済学のうちにある機械論なるものは、かつて生産力を単なる技術または生産用具であるとしたことがあるが、これは完全な錯誤である。そのために彼等は生産力の一面、すなわち生産用具（技術条件）の一面だけを見、かえつて社会的生産力の基本的要素である労働者を完全に見失つてしまつた。このような誤つた生産力観念をもつことにより、不可避的に機械論者はどのような生産用具もどのような社会経済制度にもあるという非常に誤つた結論を出さざるを得なかつた。かつて一九二八年から三〇年の間に、中国のトロツキストは、中国は資本主義社会であり、封建的關係はただ僅かに残つているに過ぎないという反革命「理論」を発表したが、彼等の依拠する経済思想は正にこ

のような機械的・反マルクス主義的生産力観念であつた。トロッキストはまず生産力を生産用具と同じであるとし、そうして「生産力がどうであるか、それに応じて生産関係がどうであるか」(スターリン)というマルクス主義の命題を歪曲して、「このような生産用具があれば必ずこのような生産関係がある」という反革命的幻想を作り上げた。彼等は機械・汽船が当時の中国経済に占めた比重を誇大視し、独断的に当時の中国が資本主義社会であつたという反革命的結論を出したのである。

生産用具は生きた人間労働が加えられる以前は、結局死んだ物に過ぎない。労働者が機械を動かすまでは、機械は少しも動くことのできないものであつて、全く生産の作用をしない。かくして、歴史博物館に陳列されている青銅器・手磨などは、現実の生産力の要素として算えることはできない。人間を離れ、労働力を離れて、生産用具だけが社会的生産力の要素とはな

らない。マルクスは述べている、「労働過程に奉仕していない機械は、無用のものである。さらにそれは自然による新陳代謝の破壊作用を受ける。鉄は錆び、…生きた労働がこれらの物を把え、それらを死から復活させ、それらを可能的使用価値から現実的能動的なものに転化させねばならない。」と(摘訳「資本論」ロシア語版、第一卷、一九〇頁)。

生産用具は一定の生産経験と労働技能とをもつた人間——労働者・農民——が製造したものである。人間は生産用具を用いて自分の生活に必要な物質資料を生産しつつある。したがつて労働者農民階級は生産力の最も重要な要素である。これはレーニン・スターリンが特に強調したところの史的唯物論の一命題である。解放以来各地における農産物の豊作は、その主要原因が気候あるいはその他の自然的条件にあるのではなく、自覚した勤労農民が高度の生産性を積極的に發揮したためである。天津・上海の多くの棉紡工場におい

て、解放初期に労働者は一紡錘につき（二〇番手、二〇分の計算）僅かに〇・六ないし〇・七ポンドを生産し得たに過ぎなかつたが、人民政府が労資関係の調整を実行し、労働者の福利が一応保障されるに及んで、もつともこれは労働者が朝鮮戦争を支援する愛国公約を訂立して以後であるが、一紡錘につき生産額は一・二倍に高められ、甚だしいのになると一・三倍にも高められた。「三反」、「五反」運動以後、労働者は自覚して労働生産率をさらに高めた。たとえば一織布工は今まで僅か織機十数台に過ぎなかつたのに、現在では上海国营棉紡績工場の労働英雄佩杭蘭は一人で（助手一人を含め）織機百三十余台を取扱っている。このように生産用具の不変な事情の下で、一層労働者が生産力発展の決定的要素であることを知ることができる。同時にまた、同じ生産用具が異つた社会制度で使用される時には、發揮する効果が非常に異つたものであることをも証明している。

### 労働対象は生産力の要素を構成しない

従来人々は労働対象をも社会的生産力の範疇に入れていたが、これは實際上理由のないことである。労働対象は、正に生産用具および労働力と同様に、あらゆる生産の絶対的必要条件であることは疑いない。しかしまた同時にそれは生産用具や労働力と異り、生産力の要素を構成しない。理由は極めて簡単である、すなわち労働対象はその一般的意義および根本的意義からいつて、人間が生産過程においてその上で加工する周囲の自然界である。土地・埋蔵鉱物・河海・森林などは最も一般的に最も根本的な労働対象であつて、これらの根本的な自然条件が労働対象とならなければ、生産は全然あり得ない。しかしこれらの自然条件の極めて長い歴史的变化は非常に小さいのに、人間社会の生産力は極めて短い二百年（資本主義時代）の間に驚くべき発展をなした。前者は長い期間に変化は小さく、

緩慢なものであるから、短期間内に極めて大きな変化をするもの（生産力）の構成要素とはなり得ない。一九四九年のソ同盟における工業生産量は一九一三年に比して一六・五倍に増加したが、労働対象としてのソ同盟の自然条件は、極めて小さな変化しかなかつた（ここではスターリン自然改造計画による人工的变化を除外する）。

同時に、生産力は人間の物質資料生産に利用されるものおよび自然界に対する関係を示している（簡単にいえば、人間の自然に対する関係を示す）が、自然界を構成する土地・埋蔵鉱物・河海など如何なるものもそれ自体としては、いずれも生産力の構成要素となり得ない。生産力は永遠に社会的なものであり、自然地理的環境は生産力のうちに入り得ない。

ところで、労働対象は、たとえば各種の工業原料の如く、多くのものが加工されたものであつて、それらは自然界にそのままあつたものではない。冶金工場に

おける砂鉄、機械製造工場における鋼鉄、紡織工場における棉花などは、いずれも労働対象ではあるが、いずれも自然物ではない。それらのものは鉱山・土地などと離れ難く結合している自然物ということが出来る。だから労働対象を生産力のうちに入れるには、なお充分な理由がない。

しかし以上述べたことは決して労働対象が重要なものでないことを意味していない。正に反対に、それらは社会的生産に対して極めて大きな意義をもち、それらは何の生産部門においても絶対に必要な物質的前提であつて、それらと生産用具とが一所にある時、生産手段あるいは生産資料 (means of productions) を形成するのである。

### 生産関係

以上の説明は、ただ社会的生産の一面、すなわち生産力の面だけの説明である。しかし社会的生産はなお

別の一面、すなわち生産関係 (productive relations) があり、それは人間が社会的生産過程で生み出す相互関係の面である。生産過程において、人間はただ自然界と関係をもつばかりでなく、人間相互の間にも一定の社会的関係——生産関係——を生み出す。社会発展の各歴史的段階において、人間の自然に対する加工——生産は、ただ一定の生産関係の範囲内においてのみ現実的なものとなるのであつて、歴史上における一定の生産関係を離れては、生産は抽象的概念となり、現実とはなり得ない。

歴史的発展の如何なる段階においても、物質資料の生産は常に社会的生産であつた。人間はすべて社会的動物である。彼は社会の外で、他人との生産関係の外で生存することはできない。人間は孤立して生産を行うことはできない。飄流して孤島にいたロビンソンは、小説家の書いた幻想に過ぎない。實際上人間は永遠に孤立して生産に従事するものではなく、すべてが

全体的社会的に生産活動に従事しつつある。かくして人間は生産において何人も彼等の意思によらないで生じた一定の生産関係の中に投げ入れられざるを得ないのである。

かくしてマルクスはいう、「人間は生産においてただ単に自然界に影響するばかりでなく、相互に影響し合いつつある。彼等がもし共同に活動するともに相互にその活動を交換するに適應した方式を用いなければ、生産はできない。生産が現実に行われたということでは、人間が一定の連繋と関係に入つたということであり、これらの社会的連繋と社会的関係に入つてのみ、初めて人間の自然界に対する関係もあり得るのであり、生産もあり得るのである。」（『マルクス・エンゲルス全集』第五卷、四二九頁。「レーニン主義の諸問題」モスクワ中国語訳、七三三頁に転載）。「政治経済学批判」の「序言」の中で、さらにマルクスはいう、「人間はその生活の社会的生産において（すなわち人間生活の必要

とする物質資料の生産において——スターリン）相互の間に一定の・必然的な・彼等自身の意思から独立した関係（傍点——スターリン）、すなわちその時ににおける物質的生産力の發展程度に適應した生産関係における。】（マルクス・エンゲルス選集「第一卷、二六九頁。同上七三四頁に転載）。

仮に、生産力の状況からの回答が、基本的には人間がどんな生産用具を用いて彼等が必要とする物質的資料を生産しつつあるかという問題であるとすれば、生産関係の状況からの回答は、實質的には生産手段（一切の天然物・加工された労働対象・各種の生産用具・交通用具・建築物などを含む）が、誰に所有され、誰に支配されているか——全社会に所有され、全社会に支配されているか、なお人を搾取するための個人あるいは階級の所有であり、彼等によつて支配されているかという問題である。

生産手段を誰が所有し・誰が支配するかというこの

問題に對する回答によれば、いくつかの異つた類型の生産関係があるとすべきである。もし生産手段が全社会の共同所有であり、全社会の共同支配であるならば、このような基礎の上には原始共同体的生産関係あるいは社会主義的生産関係が生れ、ここには搾取なく・人々は平等であり・互助と協同の生産関係がある。もし生産手段が少数搾取者たとえば奴隷所有者・封建地主・資本家などの所有となつており、それらの人々によつて支配されているならば、その結果として搾取と被搾取・圧迫と被圧迫の生産関係、たとえば奴隸制・封建制・資本主義などの生産関係が生れる。しかしこの二つの生産関係を除いて、なお第三類、すなわち一つの生産関係から他の生産関係へ転化する過渡期の生産関係の存在が可能である（事実上も存在しているし存在したことがある）。たとえば原始共同体制度の解体期において、農村共同体は一面において共同体の共同財産を保存しつつ、同時に家庭の私有財産が

発生していた。かくしてマルクスはいう、農村共同体は「第二の社会形態へ向う過渡的段階すなわち共有財産の上に築かれた社会から私有財産の上に築かれた社会へ向う過渡的段階である」と（『マルクス・エンゲルス全集』ロシア語版、第二七巻、六九五頁）。現在わが国における一般の農業生産合作社においては、土地は私有に属しているが、合作社の統一的指揮の下に共同的に使用さるべきものであり、社内には相当数量の公共財産があり、耕作収入はただ労働に比例して分配するだけでなく、さらに一部分は提供した土地に比例して分配されつつある。将来、このような生産合作社が発展して、社会主義的生産合作社（集体農莊）となり、集体農民公有制が実現するであろう。かくして、このような生産合作社は半社会主義的経済であり、その生産関係は完全な社会主義へ向う過渡的な生産関係である。一般的に公私合営の商工業は、私的資本主義から逐次社会主義化する経済であり、この生産関係もまた過渡

的生產關係である。

以上のようにして生産過程を可能にするためには、生産用具・労働力・労働対象などのような物質的技術的条件が必要であるばかりでなく、さらに一定の社会的条件——人間が生産過程でつくる一定の關係——が具備する必要がある。このような關係において、生産用具・労働力・労働対象など生産に必要な物質的要素が結合されて、初めて生産過程が実現するのである。

たとえば資本主義社会の生産過程は、工場・機械・原料・労働力が無条件になければならないが、これらのもの以外に、なおそれ以前に工場の所有者（資本金家）と労働力の所有者（労働者）との間に雇傭關係が成立していなければならない。この關係なしに、工場内の機械は動かないのである。

### 生産關係についての二三の解釈

ここに一つの問題が生ずる、すなわち生産關係は人

人が生産過程において生み出すところの関係であるから、その結果として、生産関係に参加する人々は直接に生産過程に参加する人々（地主と農民・工場主と労働者など）だけに限り、直接に生産過程に参加しない人々は生産関係の外にあるのではないか、という問題である。如何なる人も生産関係の外にあることはできない。商業者・金融業者・医者・教師・科学者・著作家・小説家・演劇人・機関幹部・部隊要員などは、いづれも直接生産過程に参加しないけれども、事実上彼等は社会的生産関係において一定の地位にある。

問題のキイポイントは生産過程についての概念の解釈にある。一般に説明されている生産過程は、ほとんど製造・耕作あるいは鉱山の採掘などの過程を指しているのが普通である。しかしこれは狭義のあるいは直接的な生産過程である。人間が生み出す生産関係としての生産過程は、広義の社会的生産過程であり、全社会的生産過程は、生産・交換・分配・消費の諸環節

（あるいは過程）を含み、そのうちのどれ一つを缺いても、社会的生産過程は中断せざるを得ない。社会的生産の循環過程を不断に進行させるためには、生産の前に、まず交換——機械・原料および一切の設備の購入——が行われねばならない。次に、生産は必ず分配を前提とし、分配と併行して行われねばならない。すなわちまず物質資料の分配、資金の分配、労働力の分配および生産用具の分配がなければならず、同時に収入の分配——生産に参加した者はすべて一定額の収入を得なければならぬ——がなければならぬ。最後に、生産はまた消費と統一物である、すなわち布の生産過程は棉花の消費過程であり、機械の生産過程は鋼鉄および電力の消費過程であり、電力の生産過程は石炭の消費過程であり、一切の価値の生産過程は人間の労働力の消費過程でもある。かくして、全社会的生産過程は必ず生産・交換・分配・消費の四つの過程を含んでいる。マルクスの説明を用いると、この四つは

「全体の各部分を構成し統一の中における差別である」  
〔政治経済学批判〕序言）。人間が社会的生産過程において生み出すところの關係は多面的である。如何なる人も生活のためには、必ず消費しなければならず、一切の消費する物は労働を経て生産されたものであり、生産と消費の目的に到達する前に、必ず購買（交換）が先行しなければならず、購買は必ず購買力（一定額の貨幣收入）がなければならず、それはまた国民收入の一定比例による分配の結果である。かくして、如何なる人も社会的生産關係の外にあることはできない。生産關係は實際的には複数名詞であり、生産諸關係とすることによつて一層適確となるであろう。階級社会においては、生産諸關係は必然的に階級諸關係を現わすものとなる。

政治経済学の研究するところのものは、正にこれらの生産諸關係——人類の歴史的発展の一定段階における社会的生産過程において、すなわち生産・交換・分

配・消費の諸過程において生ずるところの人間相互の關係——である。しかしこの四つの過程において、最も基本的決定的な過程は当然に生産過程であり、生産を離れて、その他の一切は論じられない。かくして、単に直接的な生産過程でのみ形成されるところの生産關係たとえば封建社会における領主と農奴、資本主義社会における資本家と労働者との間の生産關係のみが、最も基本的・主導的な生産關係である。その他の關係、たとえば封建社会における農民と商人、資本主義社会における工場主と農業資本家・商業資本家と銀行資本家あるいは手工業者と小農業者との關係などは、すべて従属的生产關係である。

主導と従属との生産關係については、なお別に一つの解釈があり、それは主体的と残余的あるいは萌芽的生產關係を指しているのである。たとえば封建社会の初期において（紀元五・六世紀の西欧、あるいは西周時代の中国たるを問わず）、領主との關係が当時の生

産關係の主体であつたが、このような關係と同時にまだ奴隸制の残余關係が並存していた。十六—八世紀前期の西欧において、主導的生産關係はなお封建的なものであつたが、同時にすでに資本主義的生産關係の萌芽——工場制手工業——が発生していた。現代の資本主義諸国においても、なお多かれ少なかれ封建的残余と小商品生産を保存しつつあるが、これは相当普遍的な事実である。解放前の旧中国において、主導的な生産關係の一つは帝國主義的收奪の資本家階級およびその支配下の買弁官僚資本家階級と中国労働者および農民大衆との間の收奪關係であり、他の一つは大量の土地を掌握しながら、僅かに農村人口の約四〇%を占めるに過ぎない地主と貧しくて立錐の土地すらないが農村人口の九〇%を占める農民との間の關係である。その他中小民族資本家階級と労働者階級、商人と手工業者との間の關係などはすべて従属的生産關係である。新民主主義革命の勝利した後における中国經濟の様子は

完全に變つてしまつた。旧時代の主導的生産關係は基本的にすでに徹底的に打ち破られ、これに代つて生じた主導的生産關係は、国营經濟を代表的なものとすゝる社会主義的生産關係である。しかし同時に現在（一九五二年）わが国にはなお多少の封建關係が残存している、すなわち少数民族地区にはまた土地改革が完成していないし、この外或る少数民族にはまだ多分に遅れた經濟が残つている。

### 歴史上における五つの基本的生産關係

人類の歴史上には基本的な五つの生産關係がある。すなわち原始共同体的・奴隸制的・封建制的・資本主義的および社会主義的生産關係がこれである。それらはいずれも一定の發展水準の生産力と結合・統一したものであつて、歴史上五つの生産様式 (mode of production) を形成している。

原始共同体制あるいは氏族制社会は階級の區別な

く・搾取関係のない社会である。生産関係の基礎は生産手段の共有制である。原始共同体的生産関係は当時の石器・弓矢をもつて代表する生産力の水準に適応したものであつた。奴隷制は人類の歴史上最初の階級対立の社会制度であり、この生産関係の基礎は奴隷所有者階級が生産手段と生産者自身（奴隷）を占有することである。このような生産関係は当時の生産力の状況に適応したものであつた。当時の人々が使用したものはもはや石器ではなく金属工具であり、すでに牧畜業・農業および手工業が現われ、これらの生産部門に分業が現われていた。奴隷制に次いで現われたのは封建社会であつた。封建制社会関係の基礎は、封建領主が生産手段（主要なものは土地である）を占有し生産的労働者（農奴）を不完全に占有することであつた。このような生産関係に適応した生産力の状況は、鉄器の進歩発展と普及化、手工業の漸次的発展あるいは手工場および工場制手工業の出現であつた。最後の階級対

立と収奪の生産関係は資本主義的生産関係であり、これは生産手段の資本家的占有制およびそれによる雇傭労働者の収奪を基礎としている。このような基本的生産関係に適応するものは機械・電氣化の生産力、機械生産の大工業制である。偉大な十月革命は、地球の六分の一の面積において人間が人間を搾取する制度を消滅させ、人類の歴史上に一つの新時代を開き、新しい社会主義的生産関係を打ち建てた。この新しい生産関係は生産手段の社会的共有制を基礎とし、それは生産力の発展に対し無限に広大な地盤を与えた。第二次世界大戦以後、この社会主義的生産関係はヨーロッパおよびアジアの人民民主主義国家においても打ち建てられるに至つた。わが中華人民共和国の誕生もまた、社会主義への坦々たる途を進み始めたのである。

これが人類の歴史上に引き続いて現われて来たところの五つの基本的生産関係であり、その簡単な内容である。

## 生産力と生産関係との相互関係

物質資料の生産は永遠に変化し発展する。このような変化と発展は永遠に生産力の変化と発展にもなつて開始するのである。生産力は社会的生産のうち最も活動的・革命的な要素であり、また同時に決定的な要素である。まず社会の生産力に変化と発展が生じて後、それに応じて人間の生産関係は変化する。かくして、生産様式における生産力と生産関係の統一は、単に兩者の社会的生産における相互結合・相互不可分の面を現わすだけでなく、さらに生産力はその性質と発展の程度に適應した生産関係を要求すること、すなわちどのような生産力が当然どのような生産関係であるべきかということを示している。しかしこれは決して生産関係が生産力の発展に影響しないということではない。生産関係が生産力の性質に適合する時には、それは主要なものであり決定的な力を持ち、真に生産力の

大きな進歩発展を決定する。しかし生産力の発展が一定の程度に達した時には、現存の生産関係と矛盾を来す。ここにおいて、現存の生産関係は再び生産力の性質と適合しなくなり、それは生産力の主要な推進者としての作用を失い、生産力発展の阻害者と變るのである。

生産関係はあまり長い間生産力の発展ならびに矛盾に立ち遅れていることはできない。生産関係はどんなに生産力の発展から遅れようと、それは遅かれ早かれ必ず生産力の発展水準に適應し、生産力の性格に適應しなければならぬ、もしそうでなければ経済危機と生産破壊という情況が生ずるのである。

社会主義制度の下にあつてもなお生産力は生産のうちで最も活動的で革命的な力でありしたがつてやはり生産関係が生産力の発展に立ち遅れる現象がある。しかし、社会主義制度の下においては、生産力と生産関係の矛盾は一般に衝突とはならない。何となればこ

においてはすでに一切の搾取階級が消滅していて社会には新しい生産関係に反抗するところの滅亡階級を組織することができず、なお多少の落後的墮性の力があつても、克服することが困難でないからである。

しかし階級社会においては、生産力と生産関係の矛盾は、必然的に衝突へと發展する。ここにおいては、生産力と生産関係の矛盾は階級矛盾と階級闘争として現われる。生産力の發展を擁護し・新しい生産関係を擁護するものは、労働者大衆とその他の新興革命階級である。生産力の發展と新しい生産関係の生長を頑固に阻害するものは、旧生産関係を代表する衰退階級である。しかしながら、この旧生産関係を維持し擁護する衰退階級のどのような頑固さがあろうとも、生産力はやがていつかは、旧生産関係の「押し売り」を破つて自己を解放するであろう。かくして、生産力の發展と新しい生産関係を擁護する階級はやがていつかは頑固な衰退反動階級に勝つにちがいない。階級社会におけ

る生産力と生産関係の矛盾は、ただ労働者階級とその他の新興革命階級の反動統治階級に対する革命的闘争を通じてのみ解決されるものである。マルクスはその「経済学批判」の序言で述べている、「社会の物質的生産力の發展が一定の段階に達する時には、それらがその中で發展して来た現存の生産関係、あるいは現存の生産関係の法律上の表現に過ぎない財産関係は、矛盾を生ずる。これらの生産関係は生産力發展の形式から生産力を束縛する桎梏に変わる。かかる時社会革命の時代が到来する」と。

旧中国の社会的生産力は、帝国主義的独占資本によつて中国で打ち立てられた植民地型の生産関係であつて、農村における封建的生産関係および国民党匪の官僚資本主義的生産関係の三者は、あらゆる面で束縛し・破壊しつつ、中国労働人民の長期にわたる重い苦難をつくり上げていた。しかし最近十余年の抗日戦争と人民解放戦争を経て、中国の社会的生産力は遂にこ

の三重の頑強無比な反動的生産關係を突破し、社会主義的生產關係と半社会主義的生產關係の誕生を促進した。この突破は、具体的には偉大な中国共産党の領導および労働者農民大衆を主力とする中国人民革命の勝利を経て実現したものである。労働者農民大衆自身は生産力の最も重要な要素であり、したがって旧中国の生産力と生産關係の矛盾は必然的に労働者農民大衆を主体とする被圧迫中国人民の帝国主義者・封建地主および官僚資本階級（三者の政治的代表が蔣匪国民党である）に対する階級闘争であつた。新民主主義社会においては、資本主義的生產關係と小私有者的生產關係があり、これらの生産關係にはすでに生産力發展との間の矛盾が益々顯著に露われ、それは結局新しい生産關係に代らねばならない。しかし社会主義的力の存在、ならびにそれが政治上においても經濟上においても領導的地位にあることによつて、これらの非社会主義的性質の生産關係の變革は、人民民主專政の国家政

權による上から下への領導、ならびに広大な人民大衆の、何よりもまず労働者と勤勞農民の、下から上への直接的支持を得ることにより、漸次的改造の方法を採つて實現することができる。

### 三 政治經濟学の対象とその發展

以上に述べた如く、物質資料の生産には二つの面がある、すなわち生産力と生産關係である。生産力は永遠に社会的なものであり、永遠に社会的性質をもつていうけれども、それ自身は却つて各種の技術的物質的要素およびその相互關係が形成するところのものでなければならぬ。試みにたとえばどのような工具を用いてどのように（労働技能）採鋳するか、どのような工具を用いて冶金しどのように冶金するか、どのような方法を用いて土壌を改良し・種子を改良し・灌漑系統を建設し農産物を増加するかなどの問題を離れて、さてどのような生産力に到達し得るか。ところでこれ

らの問題はすべて生産の技術面の問題である。これらの生産技術面の問題は、あきらかにすべて自然科学・技術科学の研究する問題であつて、社会科学の一部門である政治経済学は、これらの問題に対して解答を与えることはできない。

### 生産関係が政治経済学の研究対象である

政治経済学の研究するところのものは、生産の社会的面であり、生産関係のこの面は、すなわち生産の社会的構造である。人間が社会的生産過程において生み出すところの関係、すなわち生産諸関係が、マルクス・レーニン主義政治経済学の研究対象である。

経済学は一般に経済現象を研究するものであるといわれている。しかし経済現象の本質とは何であるか。経済現象の本質は生産関係である。一般にいわれている如く、経済現象は生産・交換・分配・消費に関する一切の現象に外ならず、具体的にいえば、価値・価

格・貨幣・資本・労賃・利潤・利息・地代・集積・危機などがそれである。これらの一切の現象は、すべて一定の人と人との生産関係を現わしている。一切の経済現象の本質は生産関係である。

たとえていえば、利潤は一つの具体的な経済現象である。本年に資本家申某が資本百万元を生産事業に投入し、一年後に彼の資本が百二十万元になるとする。

この余分の二十万元は、あたかもその百万元の生産物の如くである。その百万元の貨幣自体が、その自然的本性（たとえば物理的・化学的あるいは生理的）によつてこの二十万元という「子銭」を生産したのだから。そうでないことは当然である。何となれば貨幣はどう考えても子供を育成し得るものではないからである。もしかりに、育成が人類天賦の性質としての生理作用の結果（すなわち自然的産物）であるとしても、通常利潤あるいは儲けと称されるもの——われわれの例では二十万元——は、資本家の労働者階級に対する

搾取階級の産物であり、社会的産物である。その二十萬元は労働者が生産過程における無償労働で形成したところの剰余価値の現象化したものである。このように利潤は具体的な経済的範疇として、資本主義的生産関係を体现しているのである。さらに銀行利息を例としても、事情は同様である。資本主義国家の銀行は各種形式の貸付業務を通じて利子（子金ともいい、利息のことである）をもうける。この利息もまた同様に貨幣貸付の自然物ではなく、主として商工業資本家と銀行資本家とが剰余価値を分割した結果であり、その剰余価値もまた労働者の剰余労働が創造した成果である。かくして、「利息」自身が、實際上銀行資本家と商工業資本家とが共同して剰余価値を分配する関係を現わしており、同時にまた銀行家も労働者階級を搾取する関係に参加していることを現わしている。その他どのような経済現象も、政治経済学で研究するどのような範疇も、すべて一定の生産関係を現わしている。

ところで、政治経済学の研究対象が人間と人間との生産関係であり、物質生産の社会的面であるといつても、それは決して政治経済学が生産力の状況に全く無関係であるというのではない。生産力は依然として生産の技術面（技術条件と技術過程）がその内容であるが、それは同時に社会的生産力でもある。人間の歴史において、原始共同体的生産力・奴隷制的生産力・封建制的生産力・資本主義的生産力・あるいは社会主義的生産力などが、永遠に一切の社会的形式を離れ、どんな歴史上の生産関係をも離れて宙に浮いたものとして生産力は存在しないのである。生産力は永遠に具体的なものであり、一定の社会的形式に属しており、抽象的・非社会的生産力というものは存在しない。生産力と生産関係は内容と形式をなし、統一体をなしており、この統一体が生産方式である。政治経済学が研究するところの生産関係は、必然的に一定水準の生産力がその内容をなしており、一定の發展水準にある生産

力の社会的形式である。

生産力が社会の発展に極めて大きな作用をもち、その変動が社会発展の基本的原因であるからには、政治経済学は当然にこの生産力の生産関係・および社会経済の発展に対する重大な作用を研究しなければならぬ。同時に政治経済学は必ず生産関係の生産力発展に対する作用——その発展の促進または阻礙——を研究しなければならない。或る生産関係の生成と発展、および或る生産関係の他の生産関係への交替は緊密に生産力の発展状況に依存し、また或る形式の生産関係は或る段階に或る生産力の発展に一定の影響を与える。生産関係はすべてこのように生産力と一定の相互作用をなしつつあり、このような相互作用は政治経済学の研究範囲内にある。

このように政治経済学の対象となるものは、生産の社会的面であり、人間が社会的生産過程で形成するところの社会関係が、すなわち生産関係である。政治経

済学は社会的生産を支配しつつある法則を研究する科学であるとわれわれがいう時、その法則とは生産関係の運動法則を指しているのである。当然のことながら、前にすでに説明した如く、ここでいうところの生産関係は各種各様の生産関係あるいは生産諸関係である。ここでは直接の生産過程に基いて生ずる基本的生産関係、たとえば資本主義社会における資本家と労働者との関係の如きであるが、ここにおいても生産品の交換・分配・消費などの過程に基いて生ずる各種の関係、たとえば工場主と工場主・工場主と商店主・商工業者と消費者などの相互関係がある。

すでに上述した如く、生産・交換・分配・消費の四つはそれぞれ孤立し・隔絶したものではなく、それらは全社会的生産過程において四つの相互に連関した過程であり、全社会的生産過程の統一過程における四つの面であり、或る者はマルクスのいつた如く、「全体の各部分」であると考えている。しかしこの四つの過

程において、主導的決定的な過程は生産である。生産の社会的組織およびその運動法則が、交換・分配・消費などの過程の特質およびその運動法則を決定するのである。例をあげて説明すれば、仮に生産が資本主義制度の生産であるとするれば、その結果としてそこにおける生産品は資本主義の市場法則（労働価値の法則・需要供給の法則・生産価格の法則など）にしたがつて交換が行われ、資本主義の搾取法則（剰余価値の法則・平均利潤の法則・資本蓄積の法則など）にしたがつて分配が行われ、労働者階級と一般労働人民の消費は剰余価値の法則・労働運動の法則および資本蓄積の一般法則などによつて益々縮減（相対的ならびに絶対的）する傾向とならざるを得ない。

このように、「一定の生産が、一定の消費・分配・交換およびこれらの異なる要素間の一定の関係を制约する。」（マルクス「政治経済学批判」D。換言すれば、生産の一定の社会的形式あるいは社会組織——生産関係・

生産方式——が一定の分配と交換の性質およびその運動法則を制约する、簡単にいえば、生産関係が分配と交換の諸関係を制约する。分配・交換などの関係はすべて生産に基いて發生する関係であるだけでなく、全社会的生産過程の個々の過程あるいは面であるから、その結果としてそれらもまた当然に政治経済学の研究すべき生産の社会的関係であり、生産諸関係の中に入られねばならない。

### 政治経済学の定義と任務

エンゲルスはかつて政治経済学の一つの古典的な定義を与えている、すなわち「政治経済学は、広義に解釈すれば、人類のいろいろ異つた社会に行われる生産と交換の条件と形式およびそれに適応して、常に行われる生産品の分配の条件と形式を研究するところの、一つの科学である。」と「反デューリング論」第二編。

この定義によつて知り得る如く、マルクス・レーニ

ン主義政治経済学の任務は、いろいろと異なる社会経済構成の運動法則を研究するものであり、それぞれの歴史的発展段階における生産関係の運動法則を研究するものであつて、ある特定の歴史的段階における生産関係の運動法則だけを研究するものではない。

かくして、エンゲルスの指摘している如く、政治経済学の本質は一つの歴史科学である。時代が異り、また各民族・各国家の歴史的條件が異なれば、その生産と交換の方式もまたそれにつれて異なる。これらの異つた社会経済の発展段階、あるいは物質的生産の異つた社会構成において、それらは特有の経済法則をもち、異つた社会制度の下における経済法則と混同して一樣に談ずることはできない。しかし、当然のことながら、これは社会経済の諸発展段階、あるいは物質的生産の異つた社会構成において、共通の経済法則がないといつていのではない。エンゲルスが指摘している如く、政治経済学はまず生産と交換の発展のそれぞれ

の段階に特有な法則を考察し、しかる後にはじめて僅かな・最も一般的な・一般の生産と交換に適用し得るような法則を抽出することができるのである。

人類社会の経済生活は停止することなく発展し・豊富となり、社会経済構成を研究する任務をもつ政治経済学もまた自から発展し豊富となる。かくして、歴史科学である政治経済学は、必然的に広義の政治経済学であり、狭義の政治経済学ではあり得ず、後者はただ資本主義社会の経済法則を研究するものであるに過ぎない。

いゝわゆる広義の政治経済学は、決して如何なる時代・如何なる民族にも一般に適用し得る抽象的理論を打ち建てようとは考えず、またある特定の経済構成の研究を限度とするのでもなく、各歴史的段階の異つた社会経済的構成およびその運動法則を研究することを任務とするものである。それは単に生産関係の歴史的発展理論についてだけでなく、さらに社会的生産の歴

史的発展過程と發展法則について描写するものである。かくして理論と歴史との統一は形成される。正に、このようにして政治経済学は歴史科学である。

### 政治経済学の発展

政治経済学の理論は人類経済生活の変化と發展にしたがつて發展し豊富となり、それは完全にマルクス・レーニン主義理論の高度な科学的創造性を実証し、また同時に毛沢東の「実践論」の非常に深い科学性を実証した。「実践論」の基本的観点は、認識——理論は実践から出発し、実践が基礎となり、逆にまた実践に服務し、さらに実践において点検を受け、実践にしたがつて發展する、というにある。これらの基本的観点はマルクス・レーニン主義経済理論の發展において、われわれは最も輝かしい範例を求め得るのである。マルクスの偉大な傑作「資本論」は資本主義社会経済構成におけるいろいろの運動法則を示し、完全な科

学的経済理論をつくり上げた。彼の経済理論が科学的であるというわけは、彼が自己の主観から出発することなく、十八・十九世紀における資本主義的生産の実践を基礎としたことにある。毛主席は「実践論」においてマルクス主義の科学性を説き、資本主義大工業にともない無産階級が出現するに至つて初めて形成されたのであるといい、さらにまたわれわれは「封建社会にありながら前もつて資本主義社会の法則を認識することはできない、何となれば資本主義はまだ出現していず、その実践がないからである。マルクス主義は資本主義社会の産物に過ぎない。」と述べている。マルクスは当時の資本主義社会における多種多様な實際的材料、たとえば企業の營業報告・工場の調査統計・労働組合の数字的材料・定期刊行の新聞雑誌から政府の記録および報告書などを蒐集し考察し（これは感性認識の段階である）、その後分析・綜合・判断・推理などの論理的思考の工夫をこらし（理性認

識である）、最後に至つて初めて彼の「資本論」が書き上げられ、科学的なマルクス主義政治経済学が打ち建てられたのである。

ところで「資本論」ではまだ帝国主義の経済理論について論及されていない。これはマルクスの時代においてははまだ帝国主義的独占資本主義のいろいろな実践がなかつたからであり、「マルクスは自由資本主義の時代において前もつて具体的に帝国主義時代のいろいろな特異な法則を認識することができなかつた、何となれば帝国主義としての資本主義の最後の段階はまだ到来せず、またその実践がなかつたからである、それはレーニン・スターリンによつて初めてこの任務を担当し得たのであつた。」<sup>△</sup>実践論<sup>△</sup>。独占資本の形成は十九世紀末二十世紀初頭である。歴史はマルクス・エンゲルスからレーニンの段階にまで発展し、それにしたがつて政治経済学は「資本論」の段階からレーニンの「帝国主義は資本主義の最高段階である」の段階にま

で発展した。レーニンは帝国主義時代の多くの実際的な経済的材料を蒐集し、これらの材料に基いて彼は、生産と資本の高度の集中がすでに独占の地位に到達していることを発見した。この時、資本主義各国の経済部門内には、いづれも独占王が出現し、これらの人々は同時にトラストの主人であり、また銀行の大株主であり、彼等は社会の生産事業・金融会社・貿易会社・鉄道航運業などを、すべて自己の手に操縦し、指を屈するに足るほど少数の財団を形成した。レーニンはこれらの事実的材料を蒐集することから始めて、整理・分析・総合・判断・推理などの工夫を加え、その後には独占が帝国主義の基本的特徴であるという科学的結論に到達し得たのであり、さらに帝国主義に関する完全な理論を打ち建て得たのである。

レーニンは帝国主義の五大特徴について論断と分析を行い、帝国主義の腐朽性・寄生性および垂死について評断と解剖を行い、さらに帝国主義時代においては

資本主義發展の不均衡性が加重し社会主義革命が一国家内においてまず勝利する可能性をもつということについての理論は、すべて帝国主義の経済的実践（現実の情況）を基礎とし、無産階級の革命的実践に服務し、さらに実践の点検を受けて証明された真理であるとしている。

その後スターリンはさらに十月革命以来の世界の現実に基き、資本主義の全般的危機についての理論を打ち建てた。これはレーニンの帝国主義学説の継続的發展である。それは二つの体系——資本主義と社会主義——が同時に並存し、後者の優越性が益々前者を圧倒するという条件の下において、資本主義世界における内外の矛盾が極度に尖鋭化し、その基礎が益々ハッキリと動搖し、経済危機と失業軍が絶えず脅威となり、帝国主義国家の労働者階級と一般労働人民の革命化への傾向、および植民地と従属国の人民革命解放闘争の一般的高揚を論証している。これらの一切の結果が帝

国主義侵略陣営と反帝国主義民主陣営との闘争の尖鋭化である。

スターリンがマルクス・レーニン主義経済学説の發展に対して行つた重大な貢献は、社会主義政治経済学説の創設である。彼はソ同盟における社会主義建設の實踐に基き、さらに数次にわたる五カ年計画経済建設の經驗に基き、一連の社会主義経済法則を發表した。スターリンは新しい歴史時代の新情況に適應しつつ、マルクス主義の歴史の新しい情況に適用しない二三の個々の結論あるいは原理を創造的に改変し、適當な新観點新原理をもつてこれらに代え、このようにして大いにマルクス・レーニン主義の理論を豊富にし發展させた。

#### 四 政治経済学の党派性と戰鬥性

マルクス・レーニン主義政治経済学は唯一の科学的経済理論であり、その嚴密な科学性は恐らく無産階級

の階級性と不可分のものである。資本家階級の政治経済学は、その中心思想が腐朽し切つた資本主義経済制度の弁護に替つたことにより、それは完全に反科学的な俗流学説となつてしまつた。この古い経済学説は、当然それが代表する階級——資本家階級の、またそれが弁護する制度——資本主義の没落につれて没落する。マルクス・レーニン主義の政治経済学は無産階級（労働者階級）の科学である。それは無産階級の科学があるから、その経済理論は無産階級の階級の立場から出發することによつて、無産階級解放の思想的武器となつた。またこの理論は充分に客觀的真理を反映するものであり、したがつてそれは最も徹底した科学的理論である。かくしてレーニンはいふ、「マルクスの歴史的唯物論と全経済学説は、いずれも徹底的に客觀的真理として承認されたものによつて貫かれてゐる。」と「唯物論と經驗批判論」解放社版、三五〇頁。マルクス・レーニン主義の政治経済学のこのような階級

性は、またその無産階級の党派性を意味している。

### 政治経済学の党派性と戦闘性の一般概念

マルクス・レーニン主義政治経済学の社会経済發展法則についての知識は、各国の労働者およびその指導下にある労働者大衆を武装させた。マルクスの「資本論」とレーニンの「帝国主義は資本主義の最高段階である」という古典的著作は、労働者階級が搾取制度から自己を解放し・一般労働人民を解放するために用いる理論的武器である。スターリンの發展させた共産主義建設の理論は、ソ同盟（同時にまた全世界でもある）の労働人民が、人が人を搾取する根源を徹底的に消滅し、人類最高の理想である共産主義を実現するための闘争の理論的武器であつた。かくして、政治経済学は高度の党派性と革命的戦闘性をもつてゐる。

政治経済学は資本主義生産方式（あるいは資本主義社会の経済構成）の救い難い矛盾・その必然的崩壊お

及び社会主義への必然的交替の歴史的発展法則を深刻

に曝露し、各国の労働者階級と労働人民に闘争の経路を示し、彼等の勝利への確信を高めた。この理論の無産階級的階級性は極めて明確であつて、この理論の階級性の集中的表現は無産階級の党の政治綱領と政治路線である。スターリンはいう、「……政治上において錯誤を犯さないように、無産階級の党がその綱領を制定し實際めるに当つては、まず生産の発展法則に依り、社会経済の発展法則に依じて出发点とし活動を進なければならぬ。」と。D「レーニン主義の諸問題」中国語版、七二五頁。社会経済の発展法則に関する学問こそ、正に政治経済学である。政治経済学およびその他のマルクス・レーニン主義理論を失つて、無産階級党の闘争綱領をつくり得る可能性はなく、無産階級もまた解放の可能性がない。逆にいえば、政治経済学が一旦党の綱領・政治路線および無産階級の実際の戦闘任務から離脱してしまえば、それは一片の空虚な教条となつてしまふであらう。

### 各種の反対「理論」に対する闘争

以上のようにして政治経済学の党派性は、その戦闘性と緊密に結合して生じたものであることはいうまでもない。マルクス・レーニン主義政治経済学の戦闘性は、まずそれが各種各様の資本主義的経済「理論」に妥協することなく闘争することに現われている。それはかつて第二インターの修正主義・機械主義の労資協調説に次いで、資本主義的「平和」が社会主義および「組織的資本主義」に転化するなどという反対「理論」に対して激しい闘争を行つた。マルクス・レーニン主義政治経済学の観点によれば、資本主義はいよいよ発展し、たとえていえば帝国主義の段階に到達したとしても、その生産力と生産関係の矛盾はいよいよ尖鋭化し、社会的富の高度集中（独占）と労働大衆の貧困化との間の矛盾はいよいよ顕著となり調和し得ない

ものとなる。同時に国内国外の市場問題は益々厳しくなり、各独占資本集団間の闘争もまたいよいよ激しさを加えることとなり、根本的にはどんな「労資協調」

も、どんな「平和的変化」も問題にならず、またどんな「組織的」資本主義も不可能である。資本主義が発展して帝国主義の段階に達し、殊に資本主義が全般的危機の段階に達すると、その腐朽性と内外の矛盾はもはや全く救済する薬のないほどとなり、その混乱と無政府性もまた空前未曾有の状態に達し、かくしてどのような組織性も問題とはならない。これらの反対「理論」は全く社会帝国主義あるいは社会ファシズム（すなわち社会主義の衣を着た帝国主義者あるいはファシスト）の幻想である。英帝国主義労働党政府の行った一連の「国有化」・「完全雇傭」などという「社会主義（一）」政策の徹底的破産は最も雄弁な事実の証明である。実際、それらの反対「理論」とそれに類似した労働党政府の「社会主義」施策は、正に帝国主義大資本

家階級が労働者階級を欺騙し、革命闘争を麻痺させる罪悪事である。

ソ同盟における社会主義建設の初期において、レーニン・スターリンの社会主義工業化思想と農業集体化思想は、かつてトロツキーおよびブハーリン一派の反革命思想と激しい闘争を行った。当時トロツキー一派は「農民收奪」によって「社会主義原始蓄積」としての「超工業化」を実行するという反動的な綱領を提出した。ブハーリン一派は「富農が平和的に社会主義へ進む」という謬論を主張し、ソ同盟共産党中央部のボルシェヴィキ的工業化と農業集体化政策に公然と反対した。レーニン・スターリンの社会主義経済思想の指導により、ソ同盟の労働者階級はすばやくトロツキーおよびブハーリンの反革命「理論」を粉砕し、社会主義の建設計画を実現することに努力した。

### 政治経済学と反帝革命闘争

さらに政治経済学の戦闘性は、全世界における無産階級がこの思想的武器によつて帝国主義を顛覆し・搾取制度を絶滅して、階級と一切の被圧迫人民の解放を求め、革命闘争の上にも現われている。政治経済学はわれわれに教えている、資本主義自体が一つの基本的矛盾、すなわち生産の社会性と私人の占有制という矛盾を本来的にもつている。それは具体的には無限に拡大する傾向にある生産と益々萎縮する消費との間の矛盾に現われており、少数の大資本家の手にある富の高度な集中と広大な労働人民の極度の貧困化という矛盾の上に現われている。資本主義の独占段階において、この矛盾は異常な程度にまで尖鋭化し、益々激しい階級闘争を引き起し、最後には必然的に資本主義を崩壊させる途におし進める。このような尖鋭化した矛盾の基礎の上に、実際上帝国主義の崩潰を促進する決定的な力は無産階級（連合ならびに指導する広大な被圧迫労働人民）の革命闘争である。かくして政治経済学の

学習は、われわれを助けて帝国主義の必然的滅亡と無産階級革命の必然的勝利を認識させることができる。

中国の無産階級についていえば、第一次革命の歴史的任務の具体的表現は反帝・反封建・反官僚独占資本の新民主主義革命である。今次の革命は、正に毛主席の指示する如く、革命戦線の上からいつて、世界無産階級の社会主義革命の一部分である。ただわれわれは政治経済学の理論と方法によつてのみ、近代中国の社会経済状況を正確に分析すること、すなわち近代中国の生産関係および中国人民の生産力との相互関係を分析した後においてのみ、われわれは初めて中国革命の路線——反帝・反封建・反官僚資本の新民主主義革命路線を求め得たのである。

### 政治経済学と過渡期の戦闘任務

同時に、政治経済学はまたわが人民が中国共産党の指導の下に、国家の過渡期における総路線を貫いてい

る斗争の思想的武器でもある。

過渡期の過渡期たる所以は、現在わが国民経済の中にはなお四つの所有制（したがつていろいろな経済成分が存在している）が、すなわち全人民所有制（社会主義の国家経済）・合作社所有制（労働大衆の包括集体所有制の社会主義経済あるいは部分集体所有制の半社会主義経済）・個人労働者所有制（個人農民と手工业者の小商品経済）と資本家所有制（資本主義経済）が存在するからである。この外になお一つの過渡的な経済成分がある、それは国家資本主義経済である。それは全人民的（すなわち国家的）と資本家的の二つの所有制の結合したものであつて、社会主義国营経済と資本主義国营経済の結合である。正にこれらの経済構造の多様性こそ過渡期の社会の基本的特徴である。ただしこの五つの経済成分のうち、現在主要かつ基本的なものとはたゞ三つ、すなわち社会主義・資本主義・小商品経済である。この三つの経済成分の背後にはそれ

ぞれ一つの階級がいる、すなわち労働者階級・資本家階級および個人小生産者——主要なものは農民階級——がいる。三つの基本的経済成分間の関係は、三つの階級間の関係に現われている。かつてレーニンは過渡期経済のこのような特徴に基き結論づけていつた。すなわち過渡期においては、尖锐な階級斗争が避けられないと。このように階級斗争が非常に尖锐化する理由は社会主義と資本主義との間で誰が誰に勝つかの問題に関する斗争だからである。小商品経済はその本性にしたがつていえば資本主義経済の一類型（小商品経済は資本主義経済と同様に根本的には自然発生的に活動する価値法則の支配を受けることにより、それは資本主義生成の基礎であり、資本主義と同様に自然発生性と盲目性をもつていて）あり、かくして過渡期における経済斗争・階級斗争の主要なものは社会主義と資本主義との二つの経済成分・二つの発展路線の斗争であり、労働者階級と資本家階級との間の階級斗争であ

る。マルクス主義政治経済学は、このような過渡期の経済斗争・階級斗争を指導する理論的武器である。わが国の過渡期における総路線・総任務は、国家の社会主義工業化と国家の農業・手工業および資本主義商工業に対する改造、搾取制度の漸次的絶滅、社会主義社会の建設を通過しなければならない。このような一系列の総路線を貫徹するには、過渡期全体を通じて困難な激しい斗争に充たされている。

国家の社会主義工業化は、国民経済の計画を実現すること、市場の盲目性(市場の管理・物価の安定)を克服すること、科学技術の後進性を克服すること、建設幹部の欠乏という非常な困難を克服すること、および増産節約を行うことによつて資金を蓄積するなど一連の斗争を進めることが必要である。この一連の斗争目標は現在全面的に成功裡に展開しつつあり、最後には必ず国家の社会主義化事業は完全な勝利を収めることであろう。過渡期は社会主義の建設期であると同時

に、国民経済の社会主義改造の時期でもある。かかる時、社会主義大工業の建設、社会主義国营工業の強大な發展は、簡単にいえば、社会主義工業化であり、完全な国民経済建設の指導力と社会主義改造の物質的基礎である。過渡期における国民経済の建設は必ず全人民所有制の社会主義国营工業を指導力とし、特にそれは必ず技術最尖端・規模最大の社会主義国营工業を指導力としなければならない。これらの指導力なくして、全体の社会主義建設・社会主義改造の事業は、すべて空中樓閣となり空虚となつてしまふであろう。強大な・先進的な社会主義国营経済、特に国营工業の指導によつてのみ、何千万という小生産者(特に個人農民)は社会主義改造の路を進むことが出来るのである。また社会主義的工業化によつてのみ、次第に資本主義の自然発生性と破壊性を克服し、最後には資本主義に勝利し得るのである。かくしてスターリンはいふ、「われわれが必要とするものは決して任意のどん

な工業化でもよいというのではない。われわれの必要とする工業化は、小商品形式の工業に対して社会主義形式の工業を保証し、特に資本主義形式の工業に対する優勢が益々高まる工業化である。わが国における工業化の特点是、それが社会主義工業化であるということであり、工業のうちの公営部分が私人の経営部分に勝つことを保証し得ること、すなわち小商品経済部分と資本主義部分の工業化に勝つことを保証出来ることである。」と（ソ同盟社会主義の経済建設を論ず」第三冊、一〇二—一〇三頁）。

かくして、国家が社会主義工業化を實行することは、それ自体非常に困難な・激しい斗争任務である。この偉大な戰鬥任務の提出およびこの任務の方向と方法の確定を完成することは、すべてマルクス主義政治経済学の原理、特にレーニン・スターリンの過渡期における社会主義建設の経済理論を指導とするのである。

社会主義工業化は国家の社会主義建設事業の基本的

過程であり、正にこれなしには、社会主義建設は全く空論となつてしまふであらう。しかし過渡期における経済建設の斗争任務は、社会主義工業化だけではなく、さらに農民・手工業者などの個人経済および資本主義的商工業に対する社会主義改造の實行がある。

中国のような後進農業国家においては、従来個人農業と手工業は国民経済において非常に大きな比重を占めていた。この大海にも似た・全国人口の八五%ほどを占める農民と手工業者の生産資料に対して、社会主義を建設するために没収してはならないというわけにはいかない。彼等に対しては、相当長期間にわたつて忍耐強く教育し、説得し、彼等の組織化を援助し、彼等を個人的小生産から漸次改造して合作化・集体化の大生産とし、「……全社会経済に組織上の改造を加え、個人的単独小商品経済から公共的大経済に必ず移行させる」必要がある。（レーニン「無産階級独裁時代の経済と政治」。レーニン・スターリンはわれわれに教えて

いる、個人的小商品経済は資本主義と資本家階級を生み出す上壤であり、「国内に生み出された資本家と資本主義的個人農がなほ優勢であれば、資本主義復活の危険がある。このような危険が存在する限り、わが国における社会主義建設の眞の勝利は語り得ない。」(スターリン「食糧収買と農業発展の前途を論ず」)。かくして小商品生産の個人経済を改造することもまた、このような資本主義的自然発生的傾向と斗争することであり、資本主義を生み出す根源を除去する斗争である。同時に、農業の社会主義改造への勝利的展開は、必然的に漸次富農を制限し・排除し・絶滅する政策と緊密に連繋して起きて来る。農村におけるこのような階級斗争は、わが国における搾取と貧困を絶滅し・社会主義社会を建設するという全斗争の中の一つの重要な構成部分である。

個人小商品経済に対する改造の外に、なお一つの非常に困難な斗争任務がある、それは資本主義商工業に

対して社会主義改造を實行する任務である。過渡期においては、国家は資本主義商工業に対し利用・制限・逐次改造の政策を採る。国家は国家行政機関の管理・国営経済の指導および労働者大衆の監督を通じて、資本主義商工業の有利な点を国計民生の積極的作用に利用し、その不利な点を国計民生の消極的作用に制限し、それらを奨励指導して各種各様の国家資本主義経済に変化させ、逐次資本家的所有制を全人民的所有に代える。利用・制限・改造の三つは、現段階において国家が資本主義商工業に対して採る政策の相互に関連する結節点であり、この政策の基本的精神は、利用・制限・改造を通じて逐次資本主義を絶滅することである。利用を通じて、私営商工業は国家・人民の必要とする生産品を提供し、全国の物資交流を促進し、国家の資金蓄積面において、またさらに国家に代つて技術幹部および管理人材を養成する面においても、あらゆる面で積極的に作用する。このようにして国家は社会

主義経済の陣地を鞏固にし拡大することを可能にし、このようにして非社会主義経済成分に対して、特に資本主義経済に対する社会主義改造と資本主義搾取制度に対する社会主義の攻撃を強化する。かくして利用もまた実質上一つの斗争である。制限と改造に至つては、一層資本主義に対する直接の斗争である。制限とは資本家階級がただ利益を図り・投機を行つて公共の利益に危害を加え・社会経済の秩序を攪乱し・国家の計画経済を破壊するなど、これら一切の不法行為を制限し、国家はこれらの行為を絶対に禁止する。各種各様の形式の国家資本主義を通じて、資本主義商工業を改造する目的は、平和な道を通じて資本主義搾取制度を絶滅し、繁栄幸福な社会主義社会を建設するにある。

以上述べた如く、国家が過渡期において、社会主義を建設するために定めた各項目の斗争任務および全過渡期を通じて総路線が行うところの一切の困難な斗

争、これらはすべてマルクス主義経済学・特にレーニン・スターリンが發展させたマルクス主義政治経済学の理論、すなわち過渡期における社会主義建設の基本原理が指針となるのである。政治経済学の斗争性とその限らない革命的実践の意義は、ここにもまた有力な証明を見出すのである。

## 五 政治経済学の方法

政治経済学の研究はどのような方法によつて行われるのか。

一般に知られている如く、マルクス・レーニン主義の科学的方法は唯物弁証法あるいは弁証唯物論（したがつてまた歴史唯物論であり、社会生活の理解に応用された弁証唯物論）の方法である。政治経済学もまた当然にその例外ではあり得ない。

**物質の第一次性、存在は意識を決定する**

唯物論の根本命題——物質は第一次的である——によれば、存在が意識を決定し、政治経済学が確立する社会的物質資料の生産が一切の社会経済の主要な地位にある。上述した如く（第二節）、全社会的生産の四つの過程のうち、基本的決定的な過程は生産である。かくして若し市場縮少・経済危機・社会的富の分配不均衡・労働人民の貧困化・失業・犯罪・墮落および資本家の貧欲と侵略の野心などの現象を考えるとすれば、マルクス主義者はすべてこれを資本主義の生産から、資本主義的生産方式から理解の根拠を求め、これは資本家階級の経済学者が、ある虚構の「自然法則」（たとえばマルサスの人口法則）から、あるいは主観的な心理的要素（欲望の如き）および道徳・世相・「時代精神」などの要素から、あるいは生産以外の経済現象の中に根拠を求めると、完全に異つてゐる。

マルクス、レーニン主義政治経済学は社会経済発展

の歴史的時期の区分に対しても、生産を第一とする唯物論の根本命題から出発する。この区分に基いて、全人類の経済発展史は、五つの主要な段階に分けられる。この五つの段階が、基本的には五つの生産方式を代表する。これは資本家階級の経済学者（歴史学派の如き）が流通を主とする観点から出発して、全経済史を「自然経済」「貨幣経済」「信用経済」の三つの段階に区分する方法と、完全に異つてゐる。

同時に、「物質が第一次的である」「存在が意識を決定する」という唯物論の主要命題を政治経済学に応用して、われわれはまた別の一概念をもつ。それは次の如くである、すなわち一切の経済的範疇（概念）はすべて現実の物質的生産関係の抽象的理論としての現われである。価値・価格・労賃・資本・利潤・利息・地租などという経済的範疇は、すべて現実の物質的生産関係の理論的表現または反映でないものはない。同様に、如何なる経済法則もまたすべて現実の生産関係

（における運動法則の理論的表現である。われわれは主観的に法則をデッチ上げることはいくもできず、科学的に経済的現実の客観的法則を反映するのみである。

生産が第一位であるという観点から出発して、生産の社会的構造——生産諸関係の体系——は生産力の発展につれて発展変化し、その結果としてこれらの生産関係を反映する経済的範疇もまた当然に変化するものであり、現実の生産関係の運動法則を反映する経済法則もまた当然に変化する。昔から今まで、または永久に変化しない経済的範疇と法則は存在しない。かくして次のような結論が得られる、すなわち如何なる社会経済形態も、如何なる生産様式も、すべて歴史的過渡的性質（すなわち歴史的暫時性あるいは過渡性を意味する）をもっているが故に、資本主義という経済制度は当然に滅亡すべきものであり、過去の奴隸制度・封建制度の滅亡したのもなおさら当然のことである。同時に、経済の現実を反映する経済的範疇（概念）もま

た、歴史的過渡的性質のものである。個々の経済的範疇についていえば、商品が発展して貨幣となり、貨幣が発展して資本となり、小私有者が変化して雇傭労働者となり、価値が発展して生産価格となり、自由競争が発展して独占となるなど、すべてが現実の歴史的発展過程を現わしている。再びいろいろの経済法則についていえば、「商品——貨幣——商品」の公式が発展して「貨幣——商品——貨幣」の公式となり、労働価値法則（単純商品生産の法則と交換の法則）が発展して剰余価値法則（資本の生産法則および資本と労働の交換法則）となり、労働価値法則が発展して生産価格の法則となり、剰余価値の法則が発展して平均利潤の法則となるなど、これらもまた経済的実践の歴史的発展過程を現わしているのである。ここにおいて、経済学研究的の論理過程は現実経済の歴史的発展過程を反映し、経済的範疇と法則の論理的発展は経済的実践の歴史的発展過程の反映である。

## 論理と歴史の統一、歴史主義の方法

それは論理と歴史の統一と呼ばれる。歴史開始の場がすなわち論理的思惟開始の場であり、歴史的発展の過程が、正に論理的思惟発展の過程でもある。このような方法を歴史法あるいは歴史主義的方法といわれる。歴史主義の方法は完全に弁証唯物論の方法であり、それは政治経済学のうち唯心論派・マルクス主義の偽造家たとえばルーピン一派の如き経済的範疇の発展を把えて範疇とみなするもの——概念の自己運動（歴史的現実の発展と少しも関係がないように思われる）のような思想方法——とは完全に異っている。

一般に知られている如く、マルクスの「資本論」は簡単な商品の研究から始つてゐる。彼は商品価値の分析から移つて貨幣に至り、その後さらに貨幣研究から移つて資本に至つてゐる。このように商品価値から貨幣に至り、また貨幣から資本に至る範疇の発展は、マ

ルクスが経済的実践の歴史的発展の中から帰納し得たものである。資本主義社会を研究するために、マルクスは一路遡及して資本主義以前二三千年の原始共同体時代の直接的物々交換に至つた。彼は物々交換のうちにある価値形態を単純なもの（偶然的）から移つて拡大したものに至り、拡大したものから移つて一般なものに至り、最後に一般的価値形態（すなわち一般的等価物）から発展して貨幣形態に至る——この一列の経済的実践の歴史的発展過程を厳密に描いてゐる。同様にして、貨幣が変化して資本となり、「商品——貨幣——商品」が移行して「貨幣——商品——貨幣」となるなど、このような発展過程は、すべて経済的実践の歴史的過程でないものではなく——資本主義生産関係の歴史的発生過程には、封建関係の解体過程、小生産者の被収奪過程、原始的資本の蓄積過程、工場制手工業の形成と発展過程などを含んでいる。まずこれらの歴史的に発展する現実過程があつて後に、初めて

商品から貨幣へ・貨幣から資本へ・商品——貨幣——商品」から「貨幣——商品——貨幣」へなどという経済的範疇の論理的過程があるのである。

### 抽象法

マルクス主義経済学の他の重要な面は、この歴史的方法と密切な関連があるものであり、それは抽象法である。すでに歴史法が歴史的発展の開始するところから論理的思惟が始まるのであり、歴史の発展が最も簡単なものから漸次比較的複雑なものへと進むものである以上、その結果としてわれわれの思惟過程も必ず複雑極まる現実の事情の中から最も簡単なものを抽出することから始めねばならない。マルクスは極めて複雑な資本主義経済構造の中から、最も簡単な最も基本的な関係を抽出して研究したのであつて、この最も簡単な関係は一商品と他の一商品との交換関係であり、それはわれわれが毎日市場において何千何百回となく見る

ことのできる基本的事実である。かくしてマルクスの研究は資本主義社会の富の「原基形態」——商品——の分析から始つたのである。その後簡単な商品生産の分析を基礎とし、マルクスは商品生産の発展経路にしたがい、遂に労働力が商品となる事実を発見し、分析し、かくして剰余価値という資本主義搾取の秘密を露わしたのである。その後再び剰余価値法則を基礎として、マルクスは構成の異つた各部門の資本を考察し、労働力の価値を代表する可変資本の全生産資本中に占める比重の大小および資本の回転速度の相違により異つた利潤率が生ずること、さらに各部門の資本家間の競争によつて利潤率は平均化に向うという法則が生ずることを考察した。かようにして、一般商品と労働力という特殊な商品を比較すれば、前者は後者に比してより簡単なであり、さらに前者は後者に比してより早く発生し、剰余価値と平均利潤率とを比較すれば、同様にして前者は後者に比してより簡単であり、前者の発生は後者の

前であり、かくして資本主義の曙光期（たとえば工場制手工業のごとき）において、この生産方式はまだまだ一般的支配的地位を得ていない時であつたが、剰余価値はすでに蔽存していたが、これに反し平均利潤率はただ資本主義が相当に発達し、自由競争が相当盛んになつた時に始めて事実となつたのである。同様のことは、労働価値と生産価格との関係の中にもある。労働量が商品の価値を形成することから発展して生産原価に平均利潤を加えたものが商品の生産価格を形成するということもまた、簡単なものから複雑なものへと発展する典型的範例の一つである。価値は簡単な商品生産と同時に発生するものであるが、生産価格は資本主義生産の範疇であるに過ぎない。

このようにして、政治経済学の抽象法は具体的な複雑な現象の中から簡単な・基本的なものを抽出し、その後的一步一步現実の歴史的発展の進むにつれて漸次向上し、具体的な複雑な現象にまで回復するのである。

抽象を行う以前にあつては、われわれの面前にあるものが一つの複雑な混沌たるものであつても、抽象的思想を経、分析と総合を経て再び到達するところの具体的な複雑な姿は、いまやわれわれの頭脳の中にあつて一つの条理ある体系と系統のある全体となつて現われるのである。

以上のように、科学的抽象法は抽象から具体に至るものであり、簡単から複雑に至る思惟方法であり、同時にまた必然的に、それは本質から現象に至る思惟方法である。生産価格に比して価値は本質的なものであり、また平均利潤に比して剰余価値は本質的なものであり、さらに労働力という商品に比して普通の商品は同様に本質的なものである。抽象の本質としての価値を理解しないで、具体的範疇たる生産価格を理解することは不可能であり、明確に剰余価値を取扱わないで、平均利潤を理解する方法はなく、明確に一般商品进行分析しないで、労働力という特殊商品を説明するこ

とはできない。このような抽象的方法の助けによつて初めて、われわれは極めて複雑な資本主義社会の経済構造を徹底的に理解することができるのである。このようにして抽象法は政治経済学に対する関係は、正に実験・解剖の物理化学および生理学におけると同様に重要なものである。

以下において、われわれは弁証法のいくつかの基本的原則が政治経済学の中で具体的にどのようなように運用されているかについて語るであらう。

### 物質現象の全面的連繫

まず、形而上学の見方に反して、マルクス弁証法の第一原則は、物質現象の全面的連繫と相互依存（あるいは相互制約）を承認し、それらを孤立し・隔絶したものを見ないことである。この原則の政治経済学における応用は、たとえば歴史的連繫（歴史的連続性）の中で説明した如く、各生産様式の発生・発展・崩壊お

よび過渡がさらに高い歴史的段階に到達するという事実に現われている。どの生産方式の出現も、すべて孤立したもの・突然に到来したものではない。封建制末期における商品貨幣関係の発展なしに、また数世紀の久しきにわたる原始的資本蓄積と自由労働者の形成なしに資本主義生産方式の出現は想像することもできないことである。資本主義の物質的前提は封建社会の中で次第に準備されて来たのであり、それは正に社会主義的生産方式の物質的前提（高度に発展した生産の社会性、生産と資本の高度集中、無産階級の強大な隊伍など）が資本主義の中に準備されて来たのと同様である。

だからスターリンは述べている、「世界には孤立した現象はなく、したがつて一切の現象はすべて相互連繫・相互制約にあり、その結果として歴史上にどのような社会制度があつた時でも……、当然に……この制度から……生じそれと連関するそれらの条件から出発

する。奴隸制度は現代の条件から見れば、非常に粗野で誤つた現象であり、異常なほど道理に合わない情况である。この奴隸制度も瓦解しつゝあつた原始共同体制度の条件に下にあつては、充分に了解し得る法則にかなつた現象であり、したがつてそれは原始共同体に比べれば一歩前進している。」と「ソ同盟共産党小史」モスクワ中国語訳、一三九頁。

このようにして、資本主義という制度が生み出し、それと連関するそれらの条件(原始的資本の蓄積など)から出發して、初めてこの制度の發生が完全に合法法的なものであることを了解することができる。

全面的連関の原則を政治経済学に応用する時、スターリンは資本主義の全般的危機の分析によつて、レーニンの帝國主義論を發展させ豊富にしたのである。資本主義の全般的危機の時期において、世界資本主義の運動法則は、十九世紀の資本主義と異なるのみならず、第一次世界大戦以前の資本主義と大いに異つてゐるし、

さらに第二次世界大戦以後、資本主義の全般的危機は十倍も百倍も深刻になつた。われわれは帝國主義陣營の空前の弱さ(三つの帝國主義が撃滅され、二つが大いに弱まつた)、社会主義ノ同盟の空前の強大さ、東南欧一帯における人民民主主義國家の出現、偉大な中華人民共和國の誕生、および帝國主義の内部的矛盾の空前の尖鋭化など、これらの要因を連繫しつゝ全面的に考察する時、初めて当面の帝國主義——特にアメリカ帝國主義の腐敗性・死滅性および狂暴性を徹底的に理解することができる。今日アメリカ帝國主義は一切の國際信義を顧みず、全世界の人民の正義の要求を無視し、狂暴にも天下の不善を敢て行い、全地球の侵略計画を進めているが、これは決してその強さを示すものではなくして、その如何ともしがたさを示すものであり、狂暴に抵抗し、それによつて滅亡の運命を挽回しようとして企図しているだけである。

## 事物の不断の運動と発展

マルクス弁証法の第二の基本原則は、「形而上学に反して、弁証法は自然界を静止不動・停顿不変の状態と見ることなく、不断の運動・変化・革新・発展の状態と見、その中で常に或るものは生産され発展しつづあり、常に或るものは壊滅し衰頽しつづありと見るのである。」（『ソ同盟共産党小史』モスクワ中国語訳、一三五頁）。

マルクスは弁証法の原則を政治経済学に応用した最初の人である。マルクス以前にあつては、資本家階級の学者（古典学派を代表とする）は終始資本主義制度を永遠に変わらない「自然的秩序」とみ、それらを資本主義社会の経済法則に加え、永久不変の・如何なる時代および如何なる地域にも通用する「絶対法則」であるといつた。これに反して、マルクスは如何なる経済制度も歴史的過渡的なものとみ、それらの経済制度はすべて発生・発展・没落（消滅あるいは他の制度への移行）の段階を経過すべきものであるとし、したがつ

て一つの経済法則あるいは範疇は一切の時代・一切の地域に通用するものではないとした。マルクス主義政治経済学はある社会経済制度を、その胚胎・発生・発展・没落・死滅の過程において研究し、その全運動法則を曝露したのである。このようにして、マルクス主義政治経済学においては、如何なる経済制度あるいは経済現象およびその運動法則に対しても、すべて不断の発展・不断の変化の観点から考察され、したがつて政治経済学自身もまた不断に発展し・変化し・豊富となるのである。

**量から質へ、古いものから新しいものへ、低級なものから高級なものへの変化**

弁証法の第三の基本原則は、事物の発展を微細な緩慢な量の変化から、急激な根本的な質的变化が引き起こされると認めることである。「弁証法は発展過程を循環運動と看なさず、また過去の事物の簡単な重複と

理解せず、それを前進運動・上昇運動、古い質から新しい質への前進、簡単なものから複雑なものへの発展、低級なものから高級なものへの発展過程とする。」(上掲書、一三六頁)。

政治経済学においては、この弁証法の原則を応用した例が無数にある。商品の直接交換が長い間に無数に重複し、最後に商品群の中から一つの特定の商品(金あるいは銀)が抽出され、それが人々に公認されて一般的等価物となり、これが貨幣である。貨幣自身は本来商品であるが、それは特殊な職能をもった商品である。特殊な商品であるのは、一般商品の価値尺度および流通用具として用いられる特殊な商品であるからである。かようにして、一般商品が発展して貨幣となり商品の直接交換が発展して貨幣を通じての交換となるのであるが、これは量の変化から質の変化を起し、古い質から新しい質に移行する一例である。

さらに小商品経済から発展して資本主義となること

「政治経済学大綱」緒論(武藤)

もまた、一つの顕著な範例である。小商品経済の長期にわたる不断の発展によつて、自然発生的な商品生産者の競争過程を通じて、次第に一面においては富の集積と、他面においては小生産者の破産と無産者大衆の出現という局面が形成され、かくして商品世界には別に一つの特殊な商品——労働力——が出現し、同時に貨幣もまた資本となり、遂に簡単な商品生産から発展して資本主義生産となった。これもまた古い質(一般商品、簡単な商品)から発展して新しい質(労働力が商品となり、資本主義的商品生産)となり、簡単なものから複雑なものへ、低級なものから高級なものへの顕著な範例である。

この外、自由競争から発展して独占となり、ただ短期金融を専業とした銀行が、直接に滲入し、商工业企业を組織する財団資本の保塁としての銀行に発展し、また工業資本を主体とする独占前の段階から発展して財団資本の支配する独占資本主義の段階となるがごとき

——これらはすべて微細な量が変じて根本的な質の変化となり、古い質から新しい質へ、簡単なものから複雑なものへ、低級なものから高級なものへとという上昇運動の典型的な例である。

このような簡単から複雑へ、低級から高級への上昇運動は、客観世界の弁証法の発展という特点を極めてハッキリと現わしている。発展は直線的ではなくして、螺旋的である。それは過去の段階における歴史の再演ではなくして、ある段階から発展してさらに高い段階となるのである。マルクス・レーニン主義政治経済学は人類の歴史に対し、原始共同体・奴隷所有制・封建主義・資本主義から社会主義に到達するという五つの社会経済形態の発展法則を十分明確に描いている。

どの形態（どの歴史段階）も各々それ自身の中に次の形態に移行する物質的条件を準備し、量の変化が質の変化を引き起し、旧形態は死滅を宣告し、新形態が代つて起きてくる。後から生じて来るどの社会経済形態

も、前の形態に比較すれば一段と高いものである。このようにして、原始共同体が生じてから、一段一段上昇して社会主義・共産主義となり、極めてハッキリと螺旋形の歴史的發展をなし、社会發展の歴史的段階をなしている。そのうちのどの段階も、すべて歴史的必然性をもち、全歴史的發展過程において不可欠の歴史的過程である。

### 事物の内在的矛盾、対立物の統一——

#### 事物發展の主因

弁証法の第四の基本原則は、客観世界の一切の事物・一切の現象はすべてそれ自体に内在的な矛盾を含み、対立物の斗争である。この矛盾と斗争は事物發展の主要原因であり、量が変化して質の変化に至る發展過程の實在的内容である。事物あるいは現象における固有の矛盾の曝露に対し、また対立物の斗争を通じて發展する發展性に関して、それはマルクス・レーニン

主義の全経済学説を貫いている。まず、マルクス・レーニン主義政治経済学説は人類歴史の発展を構成する各独立の社会経済形態の発生・発展・没落およびそれのさらに高い形態への移行に対して、その根源を主としてその内在的矛盾と内部的対立物の斗争の上に見出した。それはまず生産力と生産関係との矛盾であり、さらにこの矛盾から発生するところの被搾取者と搾取者との階級斗争である。近代資本主義社会を例とすれば、その発生は封建社会の内部における矛盾という基礎の上に漸次完成したものである。資本主義社会の基本的矛盾は生産の社会性と私人の占有制との矛盾であり、それは資本主義社会における生産力と生産関係の矛盾の一表現である。この矛盾の基礎の上に、生産と消費との間の矛盾、社会的富の集中および大衆貧困化の矛盾が展開し、これらの矛盾は必然的に無産階級と資本家階級との階級斗争を益々激しいものとせざるを得ず、その後の最大の現われが無産階級の社会主義

革命である。資本主義社会以前の封建社会および奴隸所有制社会においても、すべて類似の内在的矛盾によつて発生し・発展し・消滅したのである。かくしてマルクスはいう、「一つの歴史的生産形態の矛盾の発展は、その歴史的生産形態の瓦解によつて、そこに新しい生産形態を形成する唯一の歴史的経路である。」と（「資本論」第一巻、第十三章）。

次に、マルクスは商品の分析から資本家階級社会の基本的矛盾の胚芽を発見した。マルクスの科学的分析の下においては、商品は使用価値と価値との対立的統一物であり、私的と社会的という二重性の統一体である。「資本論」の開巻第一句に述べている、「資本主義生産方式の支配しつつある諸社会の富は、『巨大な商品の集積』として現われ、個々の商品はその原基形態である。」と。商品はすでに資本主義社会の富の「原基形態」（またその「細胞」ということもできる）であり、商品の内在的対立・内在的矛盾もまた、自から

資本主義社会の内在的矛盾の胚胎となる。一つの商品は、一定量の価値をもち、その主人の占有対象である。しかしその同一の商品が或る特定性質の使用価値であり、社会的享用を提供する。換言すれば、一つの商品はその生産者（販売者）に対しては使用価値ではなくて価値であり、消費者（購買者）に対しては価値ではなくて使用価値である。二者は商品において統一し、同時にまた相互に対立し・相互に排斥する。かようにして、個人の占有の社会的享用・社会的消費（まづ購買を経ねばならない）を通じて実現する。資本家階級社会の経済法則は、資本家の個人的占有と社会的享用（消費力・購買力）との矛盾を益々激しくさせる。資本家個人は大量の社会的富を集中的に占有し、広大な労働人民は貧困のために資本家の占有する富——商品——を消費する力がない。かくして資本主義の占有制度自身が、占有の必要前提である社会的消費を制限している。こうして商品の内在的矛盾は、確か

に近代資本主義社会に内在する矛盾の萌芽である。

資本主義生産方式の発生は、資本と自由な労働力の形成を前提とし、この資本と労働の二者もまた同様に對立的統一物の明らかな範例である。資本の原始的蓄積の他の面は、正に小生産者の收奪、すなわち自由な労働力（すなわち無一物の労働者）の形成である。これら二者の尖鋭な矛盾は、それらの相互統一——資本主義生産方式の中における統一——を形成する。この資本主義における基本的矛盾の展開につれて、資本の蓄積・集中と労働者大衆の貧困化過程は、益々深刻となり拡大して行くのである。

この弁証法の法則は、また同様に社会主義経済の実践の中にも存在する。社会主義経済の実践もまた、内在的矛盾（ただし敵対性あるいは對抗性の矛盾ではない）を含み、その正面と反面・過去と将来・旧いものと新しいもの・衰頹するものと生長するもの、これらの相互斗争があるばかりでなく、この斗争を通じて前

進する。ソ同盟は第一次五カ年計画実施の前夜において、都市の社会主義大工業と農村の中小生産者としての個人農経済との間に極めて顕著な矛盾が存在していた。当時のソヴェト政権と社会主義建設事業は、この二つの異つた経済的基礎の上に置かれていた。この矛盾はスターリンの農業集団化政策を経て解決されることのできたのである。社会主義建設の全過程において、新しいものと旧いものとの斗争・衰頹するものと生長するものとの斗争が充満していた。無数の労働者発明家が絶えず現われて来て、まず生産過程のそれぞれの過程（あるいは部門）が革新され、それらはまた革新されないが、直接関連するいろいろな生産過程（あるいは部門）と矛盾が生じた。労働者階級の自覚的創造力により、これらの過程にもやがて革新が実現され、それによつて矛盾は解決され社会主義の生産力は一段と高められた。このような不断の矛盾の発生と矛盾の解決は社会主義的生産に無限の發展傾向をもたせ

た。この傾向の主要原動力はヴォルシエヴィキ化されたソ同盟労働者階級の生産陣営における英雄的戦斗（生産競争）であり、社会主義愛国主義の偉大な創造であり、さらにソ同盟の人民生活において絶えず行われている批判と自己批判の制度である。

かくして、矛盾と対立物の斗争は、事物發展の主要原因であり、経済的实践における矛盾と対立の斗争もまた、社会經濟の前進發展の主要原因である。人が人を搾取することなく・敵対的階級のない社会においては、經濟生活における矛盾は階級敵対的なものではなく、また盲目的自然發生的なものではなく、社会主義を建設する人間によつて自覚的・協力的に・計画的組織的に解決されるものに過ぎない。それは永遠に經濟危機に類似するようない災難を招くことなく、絶えず矛盾を克服あるいは解決することによつて、社会經濟を絶えず前進させるのである。